

---

**グラハム「抱きしめたいな、IS！」**

ななな

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

グラハム「抱きしめたいな、IS！」

### 【NZコード】

N0068U

### 【作者名】

ななな

### 【あらすじ】

これは、SS速報VIPに投稿しているSS『グラハム「抱きしめたいな、IS！」』と同じものです。投稿者は作者ですので安心してください。いろいろな人に見てもらいたい気持ちがあつたので重複投稿しちゃいました、テヘッ・・・・・すいません。

内容は、劇場版ガンダム00で特攻したグラハム・エーカー少佐がIS世界に飛ばされたという設定で進行します。一夏ももちろん登場します！・・・が、原作のようにハーレムとは

行きません、ヒロインの数人はハムさんと接近します。ですのでZRが許せない方はお引き取りください。

基本的に会話文だけで話が進行していきます。

地の文も書けや、ボケ！となる人もご遠慮ください、すいません。

以上を読んで、「ノープロブレムだ！」な人はどうぞ！

## 田覚め、邂逅（前書き）

初のJSSになつております。キャラ崩壊を含みます。拙いといふ、矛盾、設定の勘違いがあるとおもいますので指摘お願いします。作者の好きなキャラをつかった、自己満の塊ですが楽しんで頂けたら幸いです。

## 目覚め、邂逅

グラ「……ッ、む？此処はどこだ？見たところ何処かの格納庫のようだが。」

グラ「私は一体何を……ッ！そうだ、少年は？」「どうなつた！」

グラ「それに私は……。ここは天国だとでもいつのか？いや、私の場合地獄か。」

グラ「……ええい、考えていても埒が明かんな。とりあえず辺りを散策してみるか。」キヨロキヨロ

グラ「ここは、軍のドッグか？それにしては妙な感覚がするが……ん？」

グラ「これは……強化装甲？サイズ的に見てMSではなく人用のパワードスーツのようだな。」

グラ「私がまったく見たことのない物だ。ここは何処かの研究所の中か？」ペタッ

グラ「なにッ！？・・・今の奇妙な感覚は一体？それに淡く光つて、コンソールまで立ち上ってしまったな。起動させてしまったか。」

千冬「誰だ！そこで何をしている？」

グラ（日本語、日本人か。此処の研究員かなにかだろうか。丁度良い聞きたいことが山ほどある。）

千冬「もう一度聞く。そこで何をしている？」

グラ「すまない、勝手に触つてしまつた。私は地球連邦軍ソルブレイヴス隊所属グラハム・エーカー少佐だ。この施設の詳細とELSがどうなつたかお聞かせ願いたい。」

千冬「地球連邦軍？ELS？何を言つてゐるお前は。ここは、INS学園だが。」

グラ（どういうことだ？ELSの事件を知らないのか？いや、地球連邦まで知らないのはおかしい。それにINS学園？）

千冬「お前が何を言つてゐるのか分からんが、もう一度聞く此処で何をしている？何処から入つてきた？」

グラ「本当に知らないのか？地球連邦とE-Sを。」

千冬「だから、なんだそれは？いいから質問に答える。」

グラ「気付いたら、此処に倒れていた。」

千冬「何？それはどうこいつ？」

グラ「ああ、質問に答えたぞ。今度は私の質問に答えてもらひな。」

千冬「今度はつて、せつせから好き勝手質問してこののせじこつだ。」

「

グラ「問答無用ー此処はどじだ？」

千冬「だからE-S学園だ。」

グラ「国は？」

千冬「日本だ。」

グラ「EIS学園とは何だ?」

千冬「・・・本気で聞いているのか?EIS、すなわちインフィニット・ストラトスの操縦者を育てる教育機関だ。」

グラ「インフィニット・ストラトスだと?」

千冬「それも、知らないのか!?人用のマルチフォーム・スーツだ、丁度お前の後ろにあ」・・・。お前!EISを起動させたのか?」

グラ「ああ、すまない。触つたら起動してしまった。まずかつたのか?」

千冬「EISについて補足すると、EISを起動できるのは女性だけだ。お前は男だよな?どうせひつて起動した?」

グラ「わからない。触つたら起動したとしか言えん。」

千冬「本当か?」

グラ「嘘偽りはない」と誓わせてもらひつ

千冬「……その田て免じて一応信じさせて

グラ「さつまの反応かうする」エーティー誰でも知っているものなの  
か?」「

千冬「ああ、一般常識とこっても差し支えないだらつ。」

グラ(・・・)

グラ「ちなみに、今は西暦何年だ?」

千冬「おかしなことを聞くへな。今は二〇××年だ。」

グラ(ーーー)の様子からすると、嘘は言ひていない。だが300年近く前だと?それにエーティーという存在。私の記憶にはないし、おそれなく元の記録にもないだろう。信じがたいがこれは・・・

千冬「さて、お前の質問に答えてやったんだ。今度は私の質問に全て答えてもらひだ、少年。」

グラ「・・・いくら私が若く見えるからといって30を越えた人間に少年はやめて頂きたい。」

千冬「何回私にこう言わせる気だ。何を言つているんだ?何処から見ても齡15・6の少年だろ?」

グラ（・・・）鏡のように磨かれたISに移る自分をチラツ

グラ「・・・乙女座の運命はこうも数奇なものなのか。」

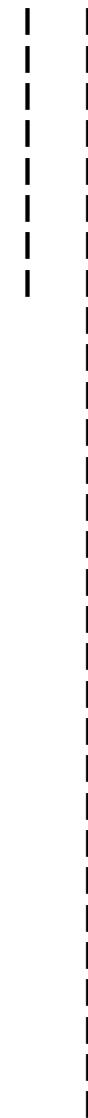
-----

その後私はあの女性、織斑 千冬といつていたな、に自分の過去を話した。つまり此処かはたまた別の世界の西暦2314年に自分は居たこと。

そしてELSという未知の来訪者との戦いに軍人として参加し特攻したこと、そして気付いたら此処に15、6歳に若返って倒れていったことをだ。

当然、信じてはくれなかつたが悪意や敵意がないことは分かつてもられたらしい。私がここに居た事や身元が不明なことは学園に入学するという条件付きで不問となつた。

どうやら私が考える以上にIS?とやらが男に動かせることは異常で重要らしい。私以外には世界に1人しかいないとのことだ。



## 織斑 一夏とグラハム・スペシャル

「はーい、皆さん席に着いてください。朝のHRを始めますよ。皆さん！学校が始まつてまだ2日目ですけど、今日はなんと転校生の紹介があります！グラハム君入つてきてください。」

グラ「失礼する。」ガラツ

女子 S 「

「グラハム・エーカーだ。出身はヨーロッパ、以後よろしく頼む。」

女子 S 「

グラ「へ、なんじへと言ひてこるー」

グラ（！？なんだこれは、音の爆弾のようなものだな。流石は武士道の国日本！これに耐えるのが漢か。）

女子1「す、い、男子！一人目の男子！金髪、イケメンだよ！」

女子2「私1組で本当によかつた。織斑君もいるしサイコーだよ！」

女子3「ああ、こんなに嬉しいことは無い。」

一夏（へ）、俺以外にもいたんだな男でIS使える奴。よし！正直周り女子ばつかできついからな、知り合い筹と千冬姉だけだし。渡りに舟だぜ。）

千冬「ふう、まったく何でこいつ毎回騒がしいんだ。静かにしひー！」

一同「シーン」

千冬「よし。次は学校が始まつて早速だがISの実技訓練を行う。これは現在の諸君達がどれだけISを動かせるかを計るために行う。全員ISスースに着替えてグラウンドに集合しろ。」

千冬「あと、織斑はグラハムを案内してやれ。お前もなれていないだろうがグラハムよりはまだろう。」

一夏「わかった、千冬姉」

千冬「わかりました、だ。そして織斑先生だ、馬鹿者。」出席簿アタック！

一夏（痛い・・・）

一夏「よオー！オレ 織斑 一夏つてゆーんだーー！ロシクなーー！」

グラ「ああ、私はグラハム・エーカーだ。よろしくたのむ。」

一夏（す、滑った。はずつ／＼、てかなんでこんな自己紹介したんだ？俺。なにか大きな力が働いた気がする。）

グラ「考え込んでいいとこり申し訳ないが、退屈しなければ変態のそしりは免れないぞ」

一夏「ああ、そうだった。急がなくちゃ！第3アリーナは唯でさえ遠いし」ダッ

一夏「今日もやつぱり・・・そら来たよーはあ。」

他クラス女子1「織斑君と転校生を発見！ 者ども出会えーーー。」

一夏「くそ、困まれると遅刻は必至だ。グラハム、全速力で駆け抜けるぞ！」ダツダツ

グラ「現在の状況についていけないがその顔をよしとする。」ダツダツ

他女子5「逃げたわよー追え、追えーーー。」

一夏「はあ、はあ。」( )を曲がれば直ぐだ！

ザツ

他女子2「とにかくギックチヨンーーー！」は通さないわよ織斑君。私達にも転校生とお話をさせてもらひや。」

一夏「糞、なうひつちで行け！」

他女子3「馬鹿は来るー。」ザツ

一 夏「こつちもかよ！？」

グラ「くつ、いつの間にか困まれていてるぞ！」これでは遅刻は免れないだろうな。・・・だが、「グッ

一 夏「グラハム、何を？」

グラ「そんな道理、私の無理でこじ開ける！」ズダッダン

他女子S「「何いい！？」」

グラ「フハハハ！人呼んで、グラハムスペシャル！！」



**織斑　一夏とグラハム・スペシャル（後書き）**

お付き合い頂きありがとうございました！  
よろしければ、感想をば

「千冬姉ー」「千冬女史ー」「・・・だから織斑先生だ

一夏「はあ、ふう。何とか切り抜けられたな。これなら急いで着替えれば間に合つた。」脱衣

一夏「それについても、すごいなグラハム。あそこを壁ジャンプでハンド飛びみたいにして切り抜けるなんてさ、しかも俺を担いで」

グラ「私は我慢弱く、落ち着きのない男なのさ。しかも、姑息な相似をする輩が大の嫌いときている。ナンセンスだが動かすにはいろいろない。」脱衣

グラ「それにしても、若いとはいるものだな。昔の私ではせいぜい1人で逃げるのが限界だった。」更衣中

一夏「?まるで、昔のほうが老いていたみたいな言い方だな(笑)」「更衣中

グラ「さてね。ところで、なぜ女子たちはあのように突撃してきたのだ?今日は何かのイベントの日なのか?」

一夏「いや、普通の日だぜ。男で工事を使えるってのが珍しいんだろ。その内落ち着くだらうけどさ。」更衣完了

グラ（珍しいだけで、あの鬼気迫る群がりよつ・・・。さすがは日本。おそらくこれも武士の鍛錬の一つなのだろう。）更衣完了

一夏「よし、着替え終わつたな。行こうぜー！」プショウ（扉が開く音）

他女子「・・・・・ビツカ～！」

一夏「・・・・・」

グラ「・・・・・」

千冬「遅いぞ！織斑、グラハム。」

一夏「でも、千冬姉ちょっとトラブルがあつて」ガスッ

千冬「言い訳をするな、それと先生だ。いい加減に学習しろ。」

一夏「ツ～、はい、すいません。先生」

グラ「千冬女史、私も油断していた。以後気をつける。」

千冬「はあ、なんでお前は上から目線なんだ。それと先生だ。」ガ  
スツ

グラ「ぐっ、失礼した。千冬さん、先生。」

千冬「まあ、いいだろ?」一人とも列に入れ。」

千冬「では、いまからエスの装着と起動を練習機を用いて行つ。各  
人速やかに行つよう!」

千冬「では、山田先生後はよろしくお願ひします。」

真耶「はい、わかりました。皆さん!今から詳しい説明をしますの  
でよく聞いて置いてくださいね～。」

千冬「おい、グラハム。こっちへ来い。」

グラ「？何か用か。千冬<sup>ガスツ</sup>女先生。」

千冬「お前は、経緯が経緯だから工Sを起動はしたもののまだ装着  
したことがないだろう。特別に指導してやるついて来い。」テクテク



斬り捨て御免！！！

グラ（また、この格納庫か。あらためて見ると、想像以上に大きいなエスは。）

千冬「背中を預けろ、そうだ、それだけでいい。あとほぼ大丈夫だと思うが肉を挟んだりしないように注意しろ。」

千冬「他は、すべてシステムが最適化をしてくれる。どうだ、簡単だろう？」

スウ、カチヤ、キシ、カシン！ “Access!”

グラ「！？・・・」これは、見える私にも敵が見え（「ゆ

千冬「それは、ハイパーセンサーだ。その名の通り高性能のセンサーで、搭乗者の知覚領域を拡張する。360度全て認識することが可能だ。」

グラ「漢字か。・・・だ・・・てつ？」

千冬「打鉄だ。<sup>うちがね</sup>日本の純国産第一世代I-Sだ。安定した性能を誇り使いやすい、初心者のお前には丁度いいだろ？。」

グラ「この漆黒の装甲カラーに、武者鎧を模したフォルム。スサノオを思い出すな、良い！」

グラ「とにかくで、第一世代とは？」

千冬「I-Sの開発段階だ。第一世代が兵器としてのI-Sの完成を目指した機体で、現在はほぼ退役している。」

千冬「その第一世代は後付武装によって、戦闘における用途の多様化に主眼が置かれた世代だ。現在最も多く実戦配備されている。」

千冬「そして今は第三世代の開発が各国で行われている。第二世代は操縦者のイメージ・インターフェイスを用いた特殊兵器の搭載を目標とした世代だが、未だ実験機の域を出ない。」

千冬「装着は出来たようだな。・・・説明するのも面倒だ、まずは身体で基本的な感覚は掴んで貰つ。習つより慣れろだ。行け！」

グラ「ああ、もとより私はこんなものを装着して大人しく説明を聞いていられるほど我慢強い人間ではない。そうさせてもうひづれ。」

ガシュイ、ガシュイ・・ガチツ

グラ「グラハム・エーカー、出る！」バシュウム！！

ガウン、シユユウウン、キュイイイイイ！

グラ（す）いな、このHJとやらは。このサイズでMSとなんら遜色がない、まさに圧倒的性能だ。）

グラ（しかし、MSの操縦よりもさらにイメージ的な、感覚的な慣れが必要になる。私は対応できるのか・・・いや、そうする必要があるか。）

グラ（MSの操縦よりもさらにイメージ的な、感覚的な慣れが必要になる。私は対応できるのか・・・いや、そうする必要があるか。）

千冬くグラハム、聞こえるか？

グラ「ああ。聞こえる。」

千冬「エリはどうだ？初めて操縦した感想は？」

グラ「すばらしいの一言で済ます。この存在に心奪われそうだ。」

千冬「そうか、それは何よりだ。これから、ダミーバルーンを射出する。全て画断する。」

グラ「了解した。グラハム・エーカー参る！」

キュイイイイイ！

グラ（ブシードモード）「切捨て御免！……」ズアッ！



## 少女、やのなせセシコア

グラ（ふう、ヨウヒツコトでは知らないことばかりだな。授業についていくだけで精一杯だ。）

グラ（何より、漢字が苦手なのは痛い。早急に対処しなくては・・・）

セシリ亞「ちよつとお時間よろしくて？」

グラ「む、私に用か？なんだ？」

セシ「まあ！何ですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度といつものがあるのではないかしら？」

グラ「失礼した。で、君は何者だ？私に何か用か？」

セシ「だから、その態度はなんですか？」

グラ「失礼したと言つていいー君は誰だ?私の記憶にはないが・・・」

セシ「わたくしを知らない?このセシリ亞・オルコットを?イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしをー?」

グラ「すまない、一つ聞いていいか?」

セシ「ふん。下々のものに要求に答えるのも貴族の務めですわ。よろじくてよ。」

グラ「代表候補生とは何だ?」

セシ「あ、あ、あ・・・」

グラ「『あ』?」

セシ「あなたもですのー?本氣でおっしゃつてます?」

グラ「ああ、私の記憶にはない。」

セシ「信じられない、信じられませんわ。織斑　一夏といい、男とは常識が欠落している生き物ですか？テレビとか見たことないのかしら・・・」

グラ「で、代表候補生とは？」

セシ「字面の通り国家代表IS操縦者の、その候補生として選出されるエリートのことですね。・・・1日同じセリフを2回も言つことになるなんて。」

グラ「なるほど、理解した。といふで、さつきの『あなたも』とはなんだ？」

セシ「さつき織斑　一夏にも同じ質問をされたのですわ。」

セシ「・・・思い出したら怒りが沸々と湧いてきましたわ。わたくしと同じく教官を倒したですって！？あんなぼんやりした男が、信じられませんわ。」ブツブツ

グラ「セシリ亞は代表候補生なのだよな？」

セシ「ハッ！？そ、そう！エリートなのですわ！」

セシ「本来ならエリートたるわたくしの様な人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡・・・幸運なのよ。その現実をもう少し理解して頂ける?」

グラ「なるほど、なんという饒倖!」

セシ「・・・馬鹿にしていますの?」

グラ「失礼。」

セシ「あなたもISについてろくに知らないのに、よくこの学園に入れましたわね。数少ない男のIS操縦者と聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思つていましたけど・・・二人とも期待はずれでしたわね。」

グラ「・・・」

セシ「ふん。まあでも?わたくしは優秀ですから、あなたのようない間に優しくしてあげますわよ。」

セシ「ISについてわからないことがあれば、まあ・・・泣いて頼

まれたら教えて差し上げてもよくなつてよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですかう。」

グラ「セシリ亞が優秀なのはよく分かった。だが、干渉・手助け、一切無用！・・・と男のopr」

セシ「なんですって！？わたくしがせっかく手を差し伸べてあげましたのにその返事は何ですか？」

グラ「待て、私が言える立場ではないが人の話は最後まで聞け！」  
ガラツ

千冬「全員、すぐに席に着け授業を始めるぞ」

セシ「・・・この返事高くついてことを忘れない」とですわね「スタッフ

グラ「待て！」

千冬「座れと言つたはずだ」ガスッ

グラ（くつ、「・・・と男のプライドでは言いたいところだが、ど

うしようもなくなつたら頬らせてもらひ。ありがと」 と上手く纏めるつもりだつたのだがな）

グラ（下手に格好をつけると要らぬ誤解を招くか・・・私の悪癖の一つだな）

グラ（分かり合ひつてるのは難しい。少年、君ならどうする？）

グラ（少年、・・・君は対話できたのか？世界と分かり合えたのか？）

千冬「授業中に別の世界にトリップするな。あと分かり合えないのはお前のせいだ」 ガスツ

一夏（千冬姉殴りすぎ） ガクブル

千冬「何か言つたか？織斑」

一夏「いえ、何もあつます。サー！」

千冬「普通に答える馬鹿者」 ガスツ

一 夏（つゆ）・・・クソ、結局殴られた（

千冬「さて、この時間は実践で使う各種装備の特性についての説明と再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める」

千冬「まずは、代表者から決める。自薦他薦は問わない、だが責任は負つてもらう。推す者もされる者もそれなりの覚悟を持てよ」  
バッ

女子1「はい、織斑君が良いと思います！」

女子2「私もそれが良いと思います」

一 夏「え？お、俺！？」 ガタ

女子3「私はグラハム君が良いと思います！」

女子4「私も、私も！」

グラ「なにー？」ガタ

千冬「2人とも席に着け、邪魔だ。あと推薦された者に拒否権はない、覚悟を持てといつたはずだ」

千冬「さて、他にはいかないか？いないのならこの2人の内で決定する」

セシ「待ってください！納得がいきませんわ！」

セシ「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！」

セシ「わたくしに、このセシリニア・オルゴットにそのような屈辱を味わえとおっしゃるのですか！？」

グラ（男なんて、か。女尊男卑の社会だとは聞いているが妙な感覚だな）

一夏（そうだ、そうだ……て、ん？）

セシ「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それ

を物珍しいからといって極東の猿や可笑しなピエロにされでは困ります！」

セシ「わたくしはこのよつた島国までEIS技術の修練に来ているのであって、サーナスをする気は毛頭ございませんわ！」

一夏（人じやなくなつてる！？でいうかイギリスも島国だろ。そんな言つほど日本と差なんかないだろ）

グラ（道化か・・・確かに昔の私はまさに其れだったが、こうもズバリと言われるといい気分はしないな）

セシ「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ」

一夏（代表にはなりたくないけど、こつまで言わるとやつぱり癪だな）

セシ「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないと自体、わたくしにとつては耐え難い苦痛で——」

一夏「イギリスだつて大したお国白慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

セシ「なつ・・・-?」

セシ「あつ、あつ、貴方ー・わたくしの祖国を侮辱しますのー?」

一夏「お前だつて日本を侮辱したひ、自分がされて嫌なことは他人にはするなつて教わらなかつたのか?」

セシ「ぐつ、・・・いいですわ、いい度胸ですわね。決闘ですわー!」

一夏「おひ、いこぜ。四五の言ひつけ分かりやす」

セシ「言つておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使いーーいえ、奴隸にしますわよ」

一夏「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐つちやしない」

グラ(・・・なにやら、物騒なことになつてきたな。皆血氣盛んだ、嫌いではない。だが、私はビリするか)

グラ(決闘とやらに興味はあるが、意地の張り合いでまがるのは大

人気ないか・・・)

セシ「そう? 何にせよどうぞいいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットと」

セシ「わたくしの専用機、祖国イギリスが生み出した第三世代IS『ブルー・ティアーズ』の実力を知らしめるまたとない機会ですわね!」

グラ（！？第三世代、最新鋭機か。・・・第一世代での性能だつた。とすれば、第三世代ともなればその性能は凄まじいのだろうか？）

グラ（考えるだけで心躍る！ふつ、私も大概だな。だがそれが私だ、仕方がない。ぜひとも合間見え、刃を交えなくてはな！くつ、大人気ないなど言つていられない）ガタツ

グラ「その話、少し待つてもらつ！私も参加しよう！」

セシ「なつ！？貴方までですの？い、良いですわ。ならこの勝負に勝つたものがクラス代表になる、それでよろしいですわね？」

一夏「ああ、別にいいぜ」

グラ「私はそれで構わない」（クラス代表には興味はないが、丁度いい大義名分だな）

千冬「勝手に話を進めるなと言いたいところだが、まあいい。話は纏まつたな。では、勝負は一週間後の月曜、放課後に第三アリーナで行う。」

千冬「試合の形式は3人での総当たり戦を行う。そして一番勝率の高いものをクラス代表とする、いいな？」

グ・ー・セ「「「はい」」」

千冬「よし、各人準備を怠らぬようにーでは、各種装備の特性についての説明する。席に着け」



## インワイッシュ・ストラトス

一夏「う、ううう……」

グラ「む、ぐつ、ぬう……」

一夏「なあ、グラハム分かるか?」

グラ「恥ずかしながら私にはさっぱりだ」

一夏「だよな。俺もだよ、意味がわからん…………。なんで  
こんなにややこしいんだ?」

グラ（こんなときには、カタギリがいてくれれば助かるのだがな。.  
·ないもの強請りしてもしょうがないか）

カツ、カツ

千冬「2人とも、まだ教室に居たか。ちょうどいい」

一夏「千冬姉！」

千冬「先・・・まあ良いか、既に放課後だものな。一人に話がある、よく聞け」

千冬「一夏、お前のＩＳだが準備まで時間がかかる」

一夏「へ？」

千冬「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそうだ」

一夏「？？？」

千冬「～はあ、なにキヨトンとした顔をしている。教科書6ページ、音読してみろ」

一夏「え、えーと何々、現在、幅広く国家・企業に情報提供が行われているＩＳですが、その中心たるコアを作る技術は一切開示されません。現在世界中にあるＩＳ４６７機、その全てのコアは篠ノ之博士が作成したもので、これらは完全なブラックボックスと化

しており、未だ博士以外はコアを作れない状況にあります。しかし博士はコアを一定数以上作ることを拒絶しており、各国家・企業・組織・機関では、それぞれ割り振られたコアを使用して研究・開発・訓練を行っています。またコアを取引することはアラスカ条約第七項に抵触し、あらゆる状況下で禁止されています』か・・・』

千冬「つまり、そういうことだ。ISは数に限りがある、本来ならIS専用機は国家あるいは企業に所属する限られた人間にしか与えられない。が、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されることとなつた。理解できたか?」

一夏「な、なんとなべ」

千冬「そしてこれは、グラハム、お前にも当てはまる。お前にも一夏同様に専用機が『えられる』ことになった」

千冬「ただ、お前も事情が事情だ。新しくISを開発することができぬい、ので学園が所有している打鉄を改修して専用機とする」

グラ「了解した。貴重なIS、託されたからには結果は出す」

千冬「ふつ、良い心意気だな。精進しろよ」

一夏「なあ、事情つてなんだ?」

グラ「!」

千冬「へー、ああ。グラハムはお前よりも急な入学だつたからな、手続きや何やらで忙しいんだ」

一夏「へー、大変だな」(なんか、変だな・・・、気のせいか)

グラ「そ、そういうえば、私も授業のときから気になつていたことがあつたのだが」

千冬「なんだ?」

グラ「一夏の幼馴染だという、篠ノ之 篠。彼女は工学開発者の篠ノ之博士と関係があるのか? 苗字が同じだか」

一夏「ああ、笄は、束さん・・篠ノ之博士の妹だよ」

グラ「ふむ、では『コアを一定数以上作ることを拒絶しており』とあるが、こんな極めて重要な発明、無理やり作らされるか情報開示させられるものではないのか? 各国の軍や機関が大人しく割り当て

られたものだけを使つとは思えないが

一夏「東さんはいま行方不明中、手配中だよ

グラ「・・・壮絶だな」

千冬「・・・この話はここまでだ。他人のプライベートに首をつつこむべきじゃない

千冬「さて、グラハム、お前の書類に関して少し話がある付いて来い。一夏、お前は戻つていろ」

## 最高のスーパー・ヒーロー、最強の剣を所望する

グラ「で、書類に関する話とはなんだ？」

千冬「ん？ああ、それは嘘だ。一夏が詐索していくと面倒だったからな」

グラ「では、一体何の話が？」

千冬「せつかも話したが、お前には打鉄を改修したものが専用機として割り当たられる」

千冬「そしてその改修をどのよつたなプランで行つかは、まだ決まっていない。」この間のお前の話を信じた訳じゃないが、全てが嘘だつたとは思えない

グラ「ただの、齢15・6の少年ではないことは私も感じ取っている。そこで、改修の方向性の希望を聞いてやうつと思つてな

グラ「少年と呼ぶのは止めてもらいたい。それは、ありがたいが・・

・良いのか？一夏にも聞かなくて」

千冬「ああ、あいつは気勢だけはいいが中身はただの素人だ。まだ、その段階には程遠い」

グラ「ずいぶん辛辣だな」

千冬「本当のことを言つていいだけだ。まあ、それでも良い気分はしないだらうからな。先に帰らせた」

グラ「なんと！？そのような細やかな心づかいも出来たのか、驚きだ」

千冬「一言多い…思つたとしても口に出だすな、…そもそも思つな！」ガニッ

グラ「すまない」

千冬「それに、さつきから聞いていたら遠慮もないな。年上にはもう少し敬意を示せ。まあ、今は放課後、オフだから許すが」

グラ（いかんな、そうだ今は30代ではないのだった。年下と話し

てこる気分だった、注意しなくては

千冬「オンのときはじめてから、注意しない。まあ、殴られたいなら話は別だが

グラ「私にそっちの趣味はない!」わかった、注意する

千冬「ふう。さて、くだらない話ここまでにしておいて本題に入るぞ。改修の方向性について希望はあるか?あるなら聞かせ

グラ「うむ。・・・そうだな。機動性と運動性を極限まで高めてもらいたい、そのためなら装甲値や装備を犠牲にしても構わない」

千冬「それでは搭乗者への負担も増すが・・・、どうする?」

グラ「無視して頂いて結構!」

千冬「ふつ、良い度胸だ。わかった、その方向で改修を進めることにする。だが、後で音を上げてベソをかいでも知らんぞ?」

グラ「『望むところだ』と言わせてもらひよ。」

千冬「な、来週の試合楽しみにこれからもがんばれ」

## グラハムガンダム、略してGガン

竜「はあーふツ、ぬ・・・メヒヒーーンーー！」スパアーネン

デサツ

一夏「ぐつ、だ、痛う・・・」

竜「・・・ビウコウ」とだ

一夏「？いや、どうこういとつて言われても・・・」

竜「ビウコウもで弱くなつてこるー？」

一夏「受験勉強したから、かな？」

竜「・・・中学では何部に所属していた？」

一夏「帰宅部。3年連続皆勤賞だ」

一夏（実際は家計のためにバイトしてたんだけど、言わぬが花だよな）

竜「——なおす」

一夏「へ？」

竜「鍛え直す！IS以前の問題だ！これから毎日、放課後3時間、私が稽古をつけてやる！」

一夏「それ、ちょっと恥へないか？？」

竜「だから、それ以前の問題だ！」

竜「情けない。ISを使うならまだしも、剣道で男が女に負けるなど・・・悔しくないのか、一夏！」

一夏「そりゃ、悔しこれ。こんな感じじゃ、勝つことも叶わないとでもきない」

第「だつたらなおの」と、特訓だつてー。」

一夏「・・・ああ、わかつたよ。俺も今の自分は許せない。篠、俺を一から鍛え上げてくれ」

篠「う、うむ。そうこうながら、わ、私が直々に稽古をつけてやる。か、感謝しりぬーー」

一夏「ああ、こんな」と頼めるの篠だけだしな、感謝してもしきれなこよ。でも、ほんとに強くなつたよなあ」

一夏「綺麗にもなつたしーー」

篠（きつ、綺麗ー？そ、そういうことをやひつとこうじやない、  
一夏／＼でも・・・そつか、綺麗か。・・・ふふつ、綺麗 綺麗）

一夏「——剣道も昔は俺の圧勝だつたのにな。努力したんだよな、尊敬するよ」

篠「うーへう、いや、それは・・・」

一夏「 篓? どうかしたか? 」

篓「 と、 とじるで、 あればどうにつけだ? 」

一夏「 あれ? 」

グラ「 はツ、 セイ! 」 ブンツ、 ブンツ

グラ「 うむ、 やはり木刀のこの握り心地、 防具の匂い。 「 極きわみ 」 を目  
指し修行したあのころを思い出す! 」

一夏「 ああ、 グラハムのことか。 僕が誘つたんだよ 」

篓「 一人で IIS の練習をすると朝晩つていたはずじゃなかつたか? 」

一夏「 そのつもりだつたけど、 グラハムも IIS については分からな  
いことが多いみたいだしさ。 困ったときは助け合わないと! 」

篓(くツーせつかく一人つきりで特訓をするはずだったのに。 . . .  
一夏のアホ)

第「でも、——」

グラ「すまない、私が居ては迷惑だつたか？誘われるまま、ほいほいついて来てしました……私は空気が読めない」

第「い、いや……別にそういうわけじゃ……気にしないでくれ」

グラ「そうか、ならば気にしない。といひでやつきの試合、相当の手練とお見受けした。一つお手合せをお願いしたい！」

第「別にいいが、経験はあるのか？」

グラ「『武士道とは死ぬことと見つけたり』……もちろんだと言わせて貰おう！かつて私はミスター・ブシドーと呼ばれた男だ。本意ではなかつたがな」

一夏（うわ、可笑しな漢字のTシャツを着た外国人と同じ匂いがある！？）

第「『葉隠』か！……それに『ミスター・ブシドー』、良い！」

一夏「ちよー？……え？ 篠さん？」

「…それが、相手の手練とお見  
受けした…お相手いたす…」

一夏「え? なにその口調! ?」

「……………」なれば・・・・・・・・・・・・・

一 夏「ねえ、おい・・・つて、え?何」の怒氣

「アシダカ」

纂「一時常」

ブシ・篇「勝負……」「ダツツ！」

ブシ「ぐつー引導をわたす、第ー！」ズバアン

「くう、舐めるなー。今日の私は阿修羅すら凌駕してこるぞー。」  
「バシイイ！」

ブシ「それは私のセリフだ！」バーン、ギリギリ

「氣にすんな、女々しこぞー。」ギリギリ

バ  
ツ

「言つてくれるな。次の一撃で決める!」スウツ

「な、ま、い、ら、も、一、一、」<sup>フ</sup> ググツ

ブシ「斬り！」

## 第「捨て！」

ブシ・第「「御免！――！」」ズアツ！

一夏「・・・・篇、戻つてきて・・・」

-----

私はフラッグファイターだ!!

一 夏 「――なあ、2人とも」

篝 「なんだ、一 夏？」

グラ 「どうしたというのだ、神妙な顔をして?」

一 夏 「今日は何曜日だ?」

篝 「?月曜日に決まっておるひつ」

一 夏 「そりだな、月曜日だ。で、月曜日は何があつたかな?」

グラ 「なんだ、忘れてしまったのか?クラス代表を決めるための決闘の日だろう。ふつ、昨日は興奮のあまり私は寝付けなかつた!」

一 夏 「そう、決闘の日だ。俺達は、この日の為に先週から特訓してきたんだよな?」

第三「ああ、その通りだ。頑張れよ、一夏！」

一夏「ありがと。けど、気のせいかもしだいんだが」

第三「そうか。気のせいだろ？」

一夏「……」ことを教えてくれる話はどうなったんだ？」

第三「……」

グラ「……」

一夏「田・を・そ・ら・す・な！」

第三「し、仕方ないだろ？ お前とグラハム、両方EVAがなかつたのだから」

グラ「う、うむ。それでは、致し方がないといつものだ」

一夏「致し方なくない！知識とか基本的なこととか、あつただろー！」

一夏「それなのに、お前達は来る日も来る日も人間離れした戦いを繰り広げて！」

一夏「それに巻き込まれる俺が、何回死を覚悟したと思つてるんだ！」

筈・グラ「…………」

一夏「田をそらすな

一夏「……はあ、でも過ぎたことはしようがないか。今はこれからのことだけ考えようか

筈「そ、 そうだな。 それがいい！」

グラ「その皿をよしとするー！」

一夏「て言つても、まだ俺とグラハム両方とも工事が届いてないんだけどな」

第三「・・・」

グラ「・・・」

一夏「・・・」

真耶「みなさん、みなさん、みんな～ん！」バタバタバタッ

一夏「山田先生、落ち着いてください。はい、深呼吸」

真耶「は、はい。す～は～、す～は～」

一夏「はい、やひで止め」

真耶「うう」

真耶「・・・」

真耶「・・・ふはあつーが、まだですかあ？」

一 夏（やまとこ、萌える）

千冬「田上の人間には敬意を払え」ズパンツ

一 夏「千冬姉・・・ズパンツ

千冬「織斑先生と呼べ。学園じり、そもそもば死ね」

一 夏「うう・・・」

真耶「そ、それでですねー来ました！グラハム君の専用I.S.I.」

グラ「なんとー？」

千冬「グラハム、すぐに準備をしろ。織斑のI.S.I.はまだ準備に時間がかかる、お前から先に試合を行つ」

千冬「ぶつけ本番になるが、ものじり。なあに、この程度の障害なんでもないだろ？」

グラ「……ああ、『望むと云ひだ』と言わせてもらおう。…」

千冬「頼もしいな。織斑、お前は寮に戻っている。お前の番がきたら呼びにいく、それまで待機している」

一夏「え、ここでグラハムの応援——」

篠「馬鹿、公平を規すためだ行くぞ」グイッ

一夏「おわッ、引っ張るな、篠。グラハム、頑張れよ！」ズル、ズル

グラ「ああ、もちろんだとも！」

千冬「話は済んだな。これがお前の云ひだ」ピッ

「ゴウン、ゴウン、ゴウン、プシュー！

グラ（！？・・・）の洗練されたフォルム、漆黒のボディ、大小一対の羽！まさにこれは・・・

千冬「どうだ？もとが打鉄とは分からぬ程に改修されているだろ

う。お前の希望通りに機動性、運動性のみを極限まで高めた機体だ。武装は試作型リニアライフルとプラズマブレイドが2本だけだ」

千冬「問題は、名前だが。・・・無難に打鉄一式とく

グラ「・・・フラッグだ」

千冬「何？」

グラ「この機体はユニオンフラッグカスタムだ。そして私は、フラッグファイターだ！！」

千冬「何を興奮しているのか知らんが、わかった。この機体はユニ・長いな。カスタムフラッグと命名する」

千冬「名前も決まった。体を動かせ、すぐに装着しろ。時間がない」

グラ「了解」スウ、カチャ、キシ”Access”

グラ（・・・ハワード、ダリル。私は最高の幸せなのだ。・・・また私の刃となってくれるかフラッグ！）

千冬「装着できたな。相手は代表候補生だ、経験がちがう。気をつ  
けろよ」

グラ「どれほどの経験差であろうと…。今日の私は、フラッグのた  
めにも負けられない」

千冬「そうか、ならば行け。行つて勝利を掴み取れ！」

グラ「ああ。…グラハム・エーカー」ガシュウ、ガシュウ、  
ガチッ！

グラ「カスタムフラッグ出るぞーー！」バシュウ！



セシ「まあ、逃げずに来た」とは褒めて差し上げますわ

グラ「男の誓いに訂正は無い。敵前逃亡などありえないだろ？」「

セシ「そう。・・・最後のチャンスをあげますわ」

グラ「なんだと？」

セシ「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、惨めな姿を公衆に晒したくなれば、今ここで謝ることになら、許してあげないこともなくってよ」

グラ（と、言いつつ射撃体勢に移行か・・・。なかなかに抜け目がないな、セシリア・オルコットちゃん）

グラ「舐められたものだな。君が何を思おうとも構わん。だがその汚名、今ここで晴らして見せよう」

セシ「そりですの。残念ですわ、それならーー」ガシュイッ

セシ「ーーお別れですわね！」ガチ

ーービシュウウム！

グラ「ぐつー？」

グラ（速い！しかもビーム兵器だと？あの大きさでーやはり、IIS、  
圧倒的性能だ。場合によつてはMS以上か）

グラ「よくも…私のフラッシュをーー！」

グラ（…だが一度はないと、行くー）ギュイッ！

セシ「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルゴットとブル  
ー・ティアーズの奏でる田舞曲で！」ビシュウ、ビシュウ、ビシュ  
ウ！

ギュイッ

ギュション

バシュウカ！

グラ（確かに、正確な射撃だ。さすがは代表候補生、国を背負つだけはある——）

グラ（——だが、移動予測が甘すぎる——幾らエスに不慣れでも、これでは私を落とせはしない。・・・いつかのアザディスタンでの縁のガンダムに比べれば！）

セシ「くつ、速い！？・・・ちょこまかと鬱陶しい方ですわね！」  
ビシュウ、ビシュウ！

グラ「連射性能には難有りだな、エス。呼吸が乱れた！そこつ！  
ガドンツ、ガドン！

セシ「あやーぐう・・・ツ」

グラ（・・・くつ、やはりこのコートアライフルも連射はきかん  
か）

グラ（仕方がない、懷に飛び込むー）ギュシュウウー

グラ「……くッ、プラズマブレイドー」ガチンッ

グラ（……やはり初めてでは口に出せないことを浮かべて）

セシ「近づけさせませんわ！」バシュウウ！

ギュギュッ！

グラ「当つはしないぞ。破片の一つでも頂く、セシリア！」

――グアッ――

セシ「そ、そんな！……なんて言つと思つまして？」

セシ「掛かりましたわ、ブルー・ティアーズー」ビュ、ビュ、ビュ  
イ！

グラ「なにー？・・・ぐうッ！」

グラ（意識外からの攻撃！？）これはフアング？いや・・・ビックト兵  
器か！こんなものまで実現せるとせ。IS、なんて性能だ！）

セシ「そのまも、墜ちてしまつたなれど」 ベンガウムー

グラ（まあ〜、被弾の硬直で回避でもない。墜ちる！？）

-----

VSセシリ亞、決着

――ドオオンッ――

セシ（ふう・・・やりましたわね。手応えもありましたし、なにより爆炎も・・・）

セシ（・・・ん、爆炎？わたくしはミサイルを撃つた覚えはありますわ。ISには絶対防衛とシールドがある、爆発なんてどこから？）

セシ「！？まさか！」

――ギュイイン！

グラ「ふツ、そのまさかだ！セシリ亞！」

グラ「この程度で私を落とせると憚りとは、笑止千万！」

セシ「・・・あの状況を凌いだことは褒めてあげますわ、けど

セシ「わたくしのブルー・ティアーズから逃れることはできません  
わー！ビシュウウッ、ビシュウウッ！

グラ（ちいっ、ライフルを盾にしなかつたらそのまま墜ちていたな。  
粋がつてみせたが、貴重なライフルとシールドエネルギーの9割を  
損失してしまった。もう後はない！）ギュイイン！

グラ（何かないのか？切り札は、このままでは、いつかやられる…。  
・・挽回の一手を――）

”――フォーマットとファイットティングが完了しました。高機動形態  
使用可能です。”

グラ（――なんと！？高機動形態だと？）

千冬くくーーああ、言い忘れていたがな、人型では機動力に限界がある。ので、そのヒュでは形態を変形することによりその限界を突破するようになっている。だが、決S>V

グラ「・・・フハハハ！ そうでなくてはな、エス！ 変形までこなすとは、やはりフラッグの名を冠するにふさわしい！」

千冬「おー！ 人の話を最後まで・・・。無駄か、この状態で何を言つても。はあ・・・」

グラ「やはり私は・・・運命の赤い糸で結ばれていたようだ、このフラッグと！」 ガコツ、ガチン！

セシ「な!? 変形しましたの？ けど、それがどうしたっていいますのー！」 ビショウ、ビション！

グラ「先程の借り、返させてもうござ、エス！ ・・・この真に私色に染まつたフラッグで！」 ギュシコウウウウウ！

セシ「！？ 速い、速すぎますわー！」 のわたくしが動きについていくない！？」

セシ「ですが、好きにさせませんわー！ もう出し惜しみはしません。『ブルー・ティアーズ』！」 ピコ、ピコ、ピコ、ピコ！

グラ（ぐうッ！確かに凄まじいGだが・・・MSのそれに比べたら  
！やはり優秀だな、HS）

グラ（ビッグト兵器とは厄介だ。もう戦たるわけにはいかないところ  
のこ）ギュルン、ギュイッ！

グラ（・・・だが、何故主砲を撃たない？いや、撃でないのか？..  
・ビッグとの併用には至つていないとすれば、勝機はあるー。）

グラ「活田させてもうあいつ、HS。私を落とせるか、それとも落と  
されるか！」「ギュイイイイイ！」

セシ（へッ、なんで当たりませんの！相手のHネルギーはあと少し  
のはず、当たれば一発ですの）

セシ（やっぱり、早く『スター・ライトモード』と『ブルー・テ  
ィアーズ』の併用ができるようにならなことこけませんわね）

グラ「どうした、身持ちが堅いな、HS！接近する」ギュイイイイ  
イイ！

セシ「近づけさせませんわー！」ビショウツー・ビショウツー・

グラ（ビットの射撃が止んだ。やはりー）ギュ、ギュウ！

――ガゴン、ガチツ！

セシ「な!? また変形しましたの? しかもこんな高速で移動中にー!」

グラ（・・・ッ、がは、はあ。）の程度のGで根を上げるものか  
！）

グラ「人呼んで、グラハムスペシャル！！抱きしめたいなあ、IS  
！」グアツ！

セシ「ツ、イ、インター セプター！」バジイツ！

セシ「わたくしに剣を使わせるだなんて。なんなんですか？あなた  
！」

グラ「あえて言わせて貰おう、グラハム・エーカーであるとー。」

グラ「たった今、君の性能に心奪われた存在だ。ガンダムと回り合ってこの気持ち、まさしく愛だ！」

セシ「な！？／＼あ、愛？？？あ、あなた、何をおっしゃりますのー！」ブルー・ティアーズ「…」ビュ、ビュイ！

グラ「フられたな。だが多少強引にでも抱きしめさせてもらひ、ヒ

ヒー！ギュイイ！

グラ「引導を渡すッ！ヒヒ！」グアツア！！

セシ（そんなー？や、やうやくー）

――バジイツィイイイン――

セシ「べつうひー」

グラ「つかつかつかつかつかー！」

『――ブカウウー試合終了。両者引き分け』

セシ「・・・え？」

グラ「な、なに！？」

最後、試合に勝利したかにみえたが・・・私もまだまだ未熟だつたようだ。後に千冬女史から聞いた話だと、私がセシリ亞を貫くのと同時にビット、『ブルー・ティアーズ』の一機が私を撃ち抜いていたようだ。威力が低いものだつたようで、あの時の血の上つた私は被弾に気付けない程度の衝撃しかなかつたが・・・エネルギーをほぼ使い切つていたフラッグには決定打となつてしまつた。

セシリ亞も意外な顔をしていたことから、無意識の内に撃つていたらしい。その戦闘センス、さすが代表候補生だということを最後に思い知らされた形となつた。

さて後に行われた一夏とセシリ亞の戦いだが、勝者はセシリ亞らしい。私は見ることは出来なかつた。後に行われるはずだつた一夏との戦いで公平を規すためといのあるが、なにより私は大怪我を負つていた。途中でのグラハム・スペシャルがいけなかつたらしい、肋骨数本にひびが入つていた。千冬女史には「私の話を最後まで聞かないからだ、馬鹿者」と呆れられてしまつたな。おかげで、一夏との試合はなくなつてしまつた。一夏の専用IJSとやらにも興味以

上のものがあったので、口惜しさは残るが、私とて人の子だ。怪我をしていてはどうしようもない。なに、次の機会を楽しみにさせてもらひたい。

## ✓Sセシリア、決着（後書き）

はい、グラハム無双すぎますよね。・・・すいません。  
ただ、グラハムは勝手に動いちゃうんですよ。だから仕方ない！（  
おい

戦闘シーンは作者の技量では何がなにやら分からないと思います。  
擬音のオンパレードだし。のでHSのアニメでの✓SセシリアとO  
Oの✓Sトロナメスを見る」とをお勧めします。

ここまでお付き合いいただきありがとうございました。では次回  
でお会いしましょう、ノシ

――サアアアアアア・・・。

セシ（今日の試合――）

セシ（結果的には引き分け。負けてはいないのに・・・）

セシ（奇襲以外、手も足も出なかつた。自分の実力の無さを、まざと見せ付けられましたわね）

セシ（・・・グラハム・エーカー）

父は、母の顔色ばかり窺う人だった・・・。そんな父が嫌いだった。父のような情けない男とは将来結婚しない、物心ついたころからそういう考えるようになつっていた。

母もそんな父を疎んでいるきらいがあつた。母は強い人だった、強く、厳しく、そして憧れの人だった・・・。

そんな母も、父も今はいない。陰謀論もあつたが状況があつさりとそれを否定した。両親は100人規模の鉄道事故により、他界した。

後に残つたのは莫大な遺産とそれに群がるうとする大人だけだ。そんな大人達から家を守るために、あらゆる勉強をし、その過程で I.S の才能が認められ代表候補生となつた。

強くなくてはならない。そうでなくては、家は守れない。

・・・けど、自分は強くあれているのかと、時々、とても不安になる。そんな時、自分のそばに居てくれる人がいればと考えてしまう。強い瞳、意思を持った理想の男性を・・・。

セシ「グラハム、エーカー・・・」

彼は、とても強い瞳をしていた。誰に媚びるでもない、己の意思で未来を切開ぐ、そんな強さを秘めた瞳だつた。

セシ（・・・なんなんですか？）の気持ちは

彼のことを考えると不思議と胸が熱くなる。今までに経験したことのない感情の奔流。

セシ（――知りたい、彼のことを）

セシ（――知りたい、その強い瞳の奥底を）

・・・出会ってしまった、理想の男性と。そう、グラハム・エーカーの人と。

## 決定、クラス代表

真耶 「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繫がりでいい感じですね！」

篠 「やつたな！頑張れよ、一夏！」

一夏 「ああ、一応ありがとうございます。先生、質問です」

真耶 「はい、織斑くん」

一夏 「俺は昨日の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になつてるんでしょうが？」

真耶 「それは——」ガタンッ

セシ 「それはわたくしが辞退したからですわ！」

セシ 「まあ、勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれは考えて

みれば当然のこと。なにせわたくしセシリア・オルコットが相手だつたのですから。それは仕方のないことですわ」

セシ 「むしろ、初見でわたくしにあそこまで喰らいついたことは賞賛に値しますわ。それで、まあ、わたくしも大人げなく怒ったことを反省しまして」

セシ 「クラス代表を譲ることにしましたわ。やはり I.S 操縦には実戦がなによりの糧。クラス代表ともなれば戦いに事欠きませんもの、早くわたくしに追いついてくれることを期待しますわ」

女子1 「いやあ、セシリアわかってるね！」

女子2 「そうだよね～。せつかく世界でたつた二人の男の I.S 操縦者がいるんだから、同じクラスになつた以上持ち上げないとね！」

女子3 「私たちは貴重な経験を積める、他のクラスの子には情報が売れる。一粒で一度おいしけ、1組は！」

一夏 （おい、人を出汁に勝手に商売するなよ・・・）

一夏 「だつたら、グラハムは？引き分けだつたんだし、そつちのほうが適任じゃ——」

千冬 「グラハムは負傷している。そんな大した怪我じゃないが、クラス代表としてEISで試合を行う以上万全の体調でないと危険だ」

千冬 「EISは唯でさえ強力な代物だ。また、クラス対抗戦ともなれば否心なく過熱した試合となり、危険度はさらに増す」

グラ （・・・くッ、せっかくクラス代表になれば未だ見ぬEISとの熱き戦いが待っていたというのに。これも私が乙女座であるが故か）

千冬 「以上の点からグラハムは選出不可だ。あと、グラハム、勝手に責任を変なものに押し付けるな」

千冬 「怪我をしたのは、私の説明を聞かないで移動変形をおこなつた自分の責任だ。反省しろ」

グラ 「・・・すまない」

千冬 「ふう。・・・よつて、いままでのことからクラス代表は織斑 一夏とする。依存はないな？」

一夏 「はい」（正直、嫌だけどこの状況じゃ仕方がないか。それに皆が選んでくれたんだし……）

千冬 「よし、ならば決定だ。織斑、やるからにはクラスの期待に答えられるように精進しろよ」

一夏 「ああ、もちろんだ、千冬姉！やるからには全力でいく」

千冬 「ふツ、返事だけは頼もしいな。……だが、敬語を使え。  
そして先生だ」 ガンツ

千冬 「まったく、色々な意味で期待を裏切らん奴だな。馬鹿者」

一夏 「うう……」

end  
part 1

## 転校生はセカンド幼馴染

part2 「転校生はセカンド幼馴染」

千冬 「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらひ。織斑、グラハム、オルコット。試しに飛んでみせろ」

千冬 「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで1秒と掛からないぞ」

グラ （ISの展開・・・人の1倍以上の大きさのISがこんな小さく、軽くなるとは。質量保存等の物理法則は完全に無視だな）

グラ （まったく、もとの世界の科学力で見ても・・・本当にとんでもない代物だな、ISは）

グラ （・・・一夏の待機形態はガントレットか、セシリ亞は左耳のイヤーカフス）

グラ （そして私のは――）

――VSセシリ亞戦直後、格納庫にて

真耶 「グラハム君、惜しかつたですね。でも、初めてで代表候補生に引き分けるなんて凄いですよ！」

グラ 「ありがとう。だが、勝利することができなかつた……もし此処が戦場なら私は死んでいた」

千冬 「まあ、そう落ち込むな。確かに動きに光るもののはあつたぞ。ただ、まだまだ全てにおいて熟練が足りないだけだ」

千冬 「それはそつと、身体は大丈夫なのか？高速移動での変形をしていたな、相当のGを受けたはずだぞ。まったく私の説明を聞かずに無茶をして」

グラ 「ああ、確かに辛かつたが吐血をしたぐらいだ。問題ないだろ、私にとつては日常茶飯事だ」

千冬 「……はあ、お前は後で精密検査だな。お前、自分がどんな無茶をしたか自覚してないだろ」

グラ 「？？？私はなにか大変な無茶をしたか？無茶といえば唯、移動変形をしただけだろう。Gに耐えなくてはいけないが、それ程度のものか？」

グラ 「そもそも、フラッグは可変機体なのだし移動しながらの変形を前提にしているのではないのか？」

千冬 「……まったく、呆れた男だな。いいか？確かにフラッグの変形は移動しながらでも可能のように出来ている。だが、それは人型でも出せる速度の時の話だ。高機動形態時の最大速度で変形

するようにはできていない」「

千冬 「まず、変形する理由がそもそも人型では不可能な速度を出すためだ。それなのに、高速移動中に減速もしないで人型に変形なんてしたら、それは人型で不可能な速度を無理やり出していることにほかならないだろう」

千冬 「機体や操縦者に多大な負担が掛かるのは当たり前だ。ただでさえお前のフラッグは操縦者の負担を無視して作られているんだ。操縦者の負担は殺人的なものになる」

千冬 「事実、今日の試合での変形では10Gを超えるほど重力が掛かっていたぞ。これは、常人ならそく失神や大怪我をするほどなのだ。場合によつては死んでもおかしくない」

グラ 「・・・・そつか、そんなに危険なものとは思わなかつたな」

グラ (たしか、カスタムフラッグ(MS)の最大Gが12Gだとカタギリが言つていたな。それに耐えたといつことは私は思いのほか異常なのか・・・)

グラ (いや。だが、あの時の私にはガンダムへの愛があつたからな。愛の力のおかげだ)

千冬 「お前は自分の異常性と変態性を自覚したほうがいい。かなり、常軌を逸しているぞ」

グラ 「・・・・・薄々、自覚はしているさ」

千冬 「ふう、次に移動変形を行うときは緊急時以外はしつかりと

減速してから戻る。こいつら身体が頑丈でも、もしもの場合がある

グラ 「承知した」

千冬 「よし。・・・といひで、お前はいつまでEDを装着しているつもりだ?」

千冬 「そろそろ、見下ろされながら話すのは我慢できなーいな。EDを解除して待機形態にしろ」

グラ 「わかつ・・・待機形態?」

千冬 「はあ、覚えていないのか?授業でもやつたぞ?」

グラ 「・・・すまない」

千冬 「待機形態とは、呼んで字の如くEDを常に待機させておくための形態だ。これは基本的に専用機持ちだけが使用できる機能で、本来の大きさの何十分の一以上もの大きさにすることができる」

千冬 「そして、その形態時の形は様々だ。セシリアのブルーティアーズであればイヤーカフスに変化する。お前のは一夏と同じくガントレットに設定してある」

千冬 「さて、EDが解除され一つの塊になるイメージをしろ。それでフラッギも待機形態に移行するはずだ。やつてみろ」

グラ 「ふむ、じつか・・・?」

スウ―――

千冬・真耶「！？」

グラ 「なんと…本当にあの巨大なEISが霧散するかのよつに消え  
ただと！？」

グラ 「驚きだな。…だがEISは何処に行つた？待機形態にな  
つた筈だが」

千冬・真耶「…」

グラ 「ん？見たところ、どこにもないな。腕には何もないし、耳  
にイヤーカフスがついてるわけでもない」

千冬・真耶「…」

グラ 「…ん？すまないが、これはどういふことだ？千冬女。  
…どうしたのだ？」

千冬 「…織斑先生だ。どうしたものかうつしたも、顔を見てみろ」

グラ 「顔？顔に何か付いているのか…？」チラツ

グラ 「…、これは…、これが待機形態か？」

千冬 「ああ、おそらくそううだう」

グラ 「しかし、待機形態はガントレットになるとつづいてな  
かつたか？」

真耶 「・・・はい、そのはすなんですかビ。ビーブしてなんでしょう  
「ひー」

グラ 「いや、聞き返されても困るのだが・・・」

千冬 「ふむ、まあ気にするな。形は違えど待機形態にはできた、  
それでいいだろ?」

グラ 「・・・・・承知した」

グラ (至んだ『極』を田描し愚行に及んだあの田々、その象徴と  
も言える)の仮面)

グラ (よもや、この形になろうとわな。これは何かの冗談か?)  
女座でなかつたとしても運命を感じずにはいられない)

千冬 「だが・・・。いへり待機形態とはいえ、その悪趣味な仮面  
を四六時中被られるのは困るな」

グラ 「あ、悪趣味・・・・・」

千冬 「本末転倒だが、普段は外して持ち歩けよ。なに、そんなに  
高張りないし可能だろ?」

グラ 「・・・了解したが、仮面は着けるためにあるのでは? その  
方が格好いいではないか」

千冬 「日常的にそんなものをつけてたら変態として通報されても  
文句は言えないな。それに格好いいと思つてるのはおそらくお前だけだ。せつから見て呉れだけは良いのだ、無駄にすることもないだ

۱۰۵

グラ  
「・・・・・・」

転校生はセカンド幼馴染（後書き）

遅くなつてしまい申し訳ありませんでした。  
引き続お楽しみいただけたら幸いです。

グラ（――そして私のはこの仮面。つむ、やはり素晴らしい意匠だな、・・・自然と昔のことが思い出されるのは少々厄介だが。しかし、・・・これの何処が悪趣味なのか、理解できない）スッ

一夏「おお、グラハムの待機形態は仮面なのか！カツ！」  
「いいな！武者みたいなデザインだし、漆黒だし」

グラ「！」

グラ「なんと、一夏にもこれの良さが分かるのか？」

一夏「ああ、もちろんだ。男だつたら分からない奴はないぜ？  
多分」

グラ「そ、そうだよなー流石、一夏だ。私が見込」

一夏「でも、普段から被つてたらさすがに引くけどな（笑」

グラ「・・・・・・すまなかつたな」

一夏「ん？何がだ？・・・てか、ど、どうした？なんか威圧感が。  
さ、殺氣！？」

グラ「・・・フツ、ひさしごりに阿修羅すら凌駕したくなつただ  
けさ」

千冬 「何を話し込んでる馬鹿者ひもー・オルコットは既に展開し終えたぞ早くしのー」 ガス、ガスツ

一夏 「はい」

グラ 「・・・はい」

一夏 （えーと・・・来い、白式ー）

シユパツ！

千冬 「よし、次、グラハム」

グラ 「一ースウ、いくぞー! 装・ちやく」 ポツ！

千冬 「静かにやれ！ 静かに」

グラ 「はい」

千冬 「あと、わざわざ仮面を着けるな。被らなくて済むはずだぞ？」

グラ 「それは、断固拒否をむと頂くー」

千冬 「よし・・・なに？」

グラ 「拒否をむと頂くー」

千冬 「冗談を言つてこぬ田ではないな。どうした？ 今日はこつも

以上に変だぞ。  
なんで仮面に其処まで拘る？」

グラ

千冬「まあ、いい。もう一回、今度は静かに装着しろ。仮面を被るのは特別に許してやる」

ケテ すまない。 礼を言つ

千冬 一 いぢ いぢ 葉 大 たか  
な、まつたく」  
まあ、いし、・・・ふう、  
調子が狂う

（ 来い！ フラッグ！！）

シユバツ！

千冬「よし。まつたく、時間は掛かったが全員装着できたな。  
・ 飛べ！  
・

ギュウン!

グラ（セシリアには遅れたな・・・。教本では『自分の前方に角錐を開きさせるイメージ』らしいが、やはりまだ感覚がつかめていないな）

千冬 「織斑、グラハム、何をやっている。スペック上の出力では二機ともオルコットより上だぞ」

セシ 「グラハムさん、一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的でしてよ」

グラ 「やはりMS同様マニコアル通りには行かないということか。あたりまえだが練習による慣れは何事においても必要だな」

セシ 「MS?」

グラ 「ああ、ただの乗り物の名称だ。昔乗つていた」

一夏 「でもさ、イメージって言われてもよく分かんないか？ 大体、空を飛ぶ感覺がまだあやふやでさ。なんで浮いてるの？」これ

グラ 「たしかに、気にしてなかつたが言われると不思議だな。スラスターとバーーーアが圧倒的に少ない。翼もあるにはあるが人型を飛ばすには小さすぎる氣もする」

グラ 「それに翼の展開方向に関係なく移動できるところを見ると飛行機とは翼の役割自体が異なつているようだな」

セシ 「説明しても構いませんが、長いですわよ？反重力力翼と流動波干渉の話になりますもの」

グ・ー 「わかった。説明してくれなくていい」

グラ （カタギリが居るなら話は別だが、私には理解出来ないだろうな）

セシ 「そう、残念ですね。ふふつ」

グラ （楽しそうに笑うな。いい笑顔だ。あの試合以来最初の軋轢は消えてしまったようだな、喜ばしいことだ）

グラ（不覚にも「乙女だ」と口走りそうになってしまった。・・・  
ん？なにか背後に気配を感じたよ？）

セシ「あの、グラハムさん。よろしければ放課後に一緒に練習を  
しませんこと？そのときはマンツーマンで教えて差し上げますわ」

グラ「おお、それは助かる。ぜひお願ひする

セシ「はい。」

千冬「三人とも何時まで其処に居るつもりだ！今は授業中だぞ、  
会話に花を咲かせるな」

千冬「織斑、オルコット、グラハム、急下降と完全停止をやつて  
見せる。田標は地表から10センチだ」

セシ「了解です。ではみなさん、お先に失礼しますわ」ギュンッ！

一夏「つまいまんだなあ」

グラ「ああ、やはり伊達に代表候補生ではないということだな

千冬「次！」

グラ「よし、今度は私が行かせて貰おう」

グラ（『背中にロケットファイヤーを噴出しているイメージ』か。  
・・・）「うか）ギュンッ！

グラ（ぬお！？は、速い！加減を間違えた、墜ちるか、クッ！）  
グウン、バシュー！

グラ（ふう、間一髪だったな。激突しなくてよかつた、さりに怪我を重ねるかもしれないからな）

千冬「大したものだな。てっきり墜落、激突するものだと思つていたぞ。初心者は大抵そうなる」

グラ「運がよかつた。もう少し停止が遅かつたらまさにそいつなつていた」

千冬「謙遜するのはいいが、たまには自分を褒めてやれよ。よし、次！」

この後、一夏は盛大に墜落、激突することになった。その衝撃たるや凄まじいものでグラウンドに少し小さめのクレーターが出来ていったぐらいだ。もうすぐで、自分もこうなつてたかと思うと正直肝が冷える。一夏には悪いが自分じゃなくてよかつたと心底思つてしまつたな。だが、それほどの衝撃でも一夏は無傷だつた。IISの搭乗者保護機能は想像以上らしい。逆にこの機能を突破しつるIISの装備の強力さもまた実感した。

## I S 訓練？（後書き）

う～ん、結構日にちを明けていたせいで各キャラがある程度ちゃんと書けているか不安ですw  
大丈夫ですよね？

千冬 「織斑、グラハム、武装を展開しろ。それくらいは自在にできることになつただろう」

一夏 「は、はあ」

グラ 「了解」

千冬 「返事は『はい』だ」

グラ 「「はい」」

千冬 「よし。でははじめよう。」

一夏 ( ) 物体を斬る、刃のイメージ。鋭く、堅固な物体。強い、  
武器 ( )

グラ ( ) フラッグ、右前腕の展開、抜刀。プラズマブレード、  
斬り伏せる ( )

グラ ( ) (来い・・・・) シュン

千冬 「織斑、遅いぞ。0・5秒で出せるようになれ。グラハム、  
展開時間は及第点だ。だが、わざわざ左手を右腕に持つていかなく  
ても出来るよつこしひ」

一夏（やつぱり厳しいなあ、千冬姉。これでも1週間の練習の賜物なのに。まあ千冬姉が甘かつたら、それは偽者確定だけだ）

グラ（フラッグ MS の経験のおかげでイメージはしやすいな。だが、これだと自然と動作をしてしまう。やはり数をこなして矯正していくしかないか）

千冬「織斑、余計なことを考えるなー。グラハムを見直してしつかりと反省をしない」「うっ！」

一夏「う・・・はい、すいません」

千冬「次、オルコット。武装を展開しない」

セシ「はい」シュン

グラ（さすが手馴れているな。既に『スターライト Mk-II』には弾倉もセットしてある。私よりも短い時間で射撃可能とするか、僅かな差だが戦場では勝敗を分かつ条件になりかねない）

千冬「さすがだな、代表候補生。ただし、そのポーズは止める。横向かつて銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしな」

セシ「で、でも」

千冬「反論は努力してからにしな。直せ、いいな」

セシ「・・・はい」

千冬 「では、次は近接用の武器を展開しろ。グラハムは射撃武装だ」

セシ 「えつ。あ、はつ、はい」

グラ 「はい」

グ・セ ((べつ……))

グラ (プラズマブレイブと違つてイメージが掴みにくい)

千冬 「まだか? 一人とも」

セシ 「す、すぐです。ああ、もうつ! 『インターフォン』

! シュン

グラ 「ちいっ、ライフル!」 シュン

千冬 「・・・何秒掛かっている。お前達は、実践でも相手に待つてもうつせりもりか?」

セシ 「じ、実戦では近接の間合いに入らせませんーですから、問題はありませんわ!」

グラ 「私にライフルは不要だ。どんな猛攻だつと敵の懷に入り込み必ず斬り伏せてみせるわ!」

千冬 「おい、お前達の発言は相反しているぞ」

千冬 「それに、オルゴット。お前はグラハムとの対戦で初心者に

簡単に懐を許していたように見えたが？

千冬 「そして、グラハム。お前は確かライフルが無ければ開始早々に撃墜されたるところだったよな？私の記憶違いだったかな？」

グラ 「…………」

グラ 「……だいぶ、子供っぽい屁理屈をこねてしまった。すまない。戦場では何が起こるか分からぬ、全てにおいて完璧が要求されるのを私は知っている。でなければ生き残れない」

セシ 「わたくしも子供すぎました。代表候補生たるもの、弱点を残しておいてしまうなんて許されないことですもの。努力しないと」

千冬 「分かればいい、励めよ。…………して、時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドは片付けておけよ」

一夏 （う・・・・自業自得だけど、骨が折れそうだな。筹は・・・既に居ない）

一夏 （へん、いいもんね。グラハムに・・・居ない。じゃあ、セシリ・・・居ない）

一夏 「…………」

H.S訓練？（後書き）

ちょっと一夏の扱い酷くしそうだかな?「めんな  
さて次回はようやく鈴の登場です。では、ノシ  
W

## 邂逅、セカンド幼馴染

夜、IIS学園正面ゲート付近

鈴 「ふうん、ここがそつなんだ・・・」

鈴 「えーと、受付ついでビリにあるんだつけ」

鈴 「本校舎1階総合事務受付・・・・つて、だからそれどこにあんのよ」

鈴 「はあ、自分で探せばいいんでしょ、探せばまあ

グラ（ふむ、昼間は悪い）としたから訓練中の一夏に差し入れでもと思って来てみれば・・・

グラ（なにやら見慣れない少女がキヨロキヨロしているな。何かを探しているみたいだが、話しかけた方がいいのか？）

鈴 「つたぐ、出迎えがないとは聞いてたけど、ちょっと不親切過ぎるんじゃない？政府の連中にしたつて、異国に15歳を放り込むとか、なんか思つところないわけ？」

グラ（それにしても、私並に独り言が多いな。傍から見るとこんな感じなのか・・・私も自重しないとな）

グラ（さて、政府？異国？彼女は日本人ではないのか。うーむ、確かによく見ると違うな、中国人か？）

鈴 （誰かいないかな。生徒とか、先生とか、案内できそうな人）  
キヨロキヨロ

グラ （！？ てつ、何を私は隠れているんだ？いかんな咄嗟に体が動いてしまった。これではストーカーじゃないか）

鈴 （やつぱりこんな時間だから誰もいないか。あーもー、面倒くさいなー。空飛んじゃおうかな・・・）

鈴 （つて、そんなことしたら最悪外交問題になりかねないわね。政府の連中も情けない顔で念押ししてたし）

鈴 （ふつふーん。まあねー、私は重要人物だもんねー。自重しないとねー）

グラ （おお、今度は不敵に笑いだしたぞ。・・・見ていて飽きないな）

鈴 （やつと日本に戻つてこれたな・・・）

鈴 （この日のためにずっと頑張ってきた、待つてきた。・・・アイツ、元気にしてるかなあ）

グラ （・・・い、いかん。これでは本当のストーカーだ…さて、声をかけるか）

鈴 「ハア、早く会いたいよ・・・いちーー」

グラ 「失礼する、そこの中年よ。なにか探しているのか？よけれ

ば手伝つが

鈴 「ツー? // バツ!

グラ 「どうした?」

鈴 「い、いつからそこへいたのよーとこつか何で男が此処にいるのよ!」

グラ 「たつた今通りかかったところだ。それと、勘違いされでは困るが私は一応ここに生徒だ。決して変質者などではないから安心してくれ」

鈴 「ああ、なるほど。あなたが二人目の男でEISを起動させたって奴ね。・・・もしかしてだけ、さつきの独り言聞いていたりした?」

グラ 「なんのことだ?たつたいま通りかかったところだからな、独り言?」

鈴 「そ、そう、聞いてないならいいわ。気にしないで」

グラ (最後のは聞き取れなかつたが、全て聞いていた。なんて言つたら、なんだかただじやすまない気がするな。微妙に殺氣が滲み出でいるし)

グラ 「それよりも、何か探しているのか?キヨロキヨロしていたが

鈴 「そうーちゅうじよかつたわ、あんた。総合事務受付つて何

処、案内して！」

グラ 「それは構わないが、先にこれを友人に届けてやりたい。すぐそこのアリーナで特訓をしているらしいから差し入れを、と思つてね。いいか?」

「別にいいわよ。でも、そうと決まった早く行くよ」

（活潑な少女だな、いいことだ）

テクテク

「よし、着いたな。渡してくるが、ここで待っているか？」

鈴  
「うん、そうすう——」

「だから・・・でだな・・・」

鈴 (あ、声が聞こえてきた。なんだ、一夏じゃないのか。もし  
かしてつて思つたけど)

一 夏 「だから、そのイメージがわからないんだよ」

鈴(?)

鈴（いの細は、一夏ー）

「やっぱり、あたしも着いてく。アリーナの中見たいし」

グラ 「そつか」

鈴 （一夏、あたしつてわかるかな。わかるよね。1年ちょっと会わなかつただけだし）

鈴 （大丈夫、大丈夫！もしわからなかつたとしても、それはあたしが美人になつたからだし！）

鈴 （よし！）

鈴 「一夏、いつになつたらイメージが掴めるのだ。先週からずっと回じとこひで詰まつてゐるぞ」

鈴 （え？）

一夏 「あのなあ、お前の説明が独特すぎるんだよ。なんだよ、『くいって感じ』って」

鈴 「・・・くいって感じだ」

一夏 「だからそれがわからないつて言つて　おい、待てつて鈴！」

鈴 「・・・・・」

グラ 「どうした？行かないのか？」

鈴 「・・・教えて、受付の場所。あとは一人で行く

グラ 「そ、そつか。それなら、そこの校舎が本校舎だ。その1階にいけばすぐ見つかると思つ」

鈴 「そう、ありがと。それじゃ」 テクテク

グラ  
まあ、いいか

鈴 （誰？あの女の子。なんで親しそうなの？名前で呼び捨てだつたし。つてこいつがなんで名前でよんでもんの…）

鈴 （もしかして彼女とか？いや、そんなはずないわよね、でも…  
…。ああ、モヤモヤする）

鈴 （やういえば、さつきのあいつに聞いとけばよかつた、友人つていつてたし。やういえば、ちょっと失礼だつたかな案内してくれたのに）

鈴 （いや、今はそんなことよりも一夏とあの女子のことで…）

\* \* \* \* \*

受付 「はい、以上で手続きは終了です。HHS学園へようこそ、鳳  
鈴音さん。なにか質問はある？」

鈴 「織斑一夏つて、何組ですか？」

受付 「ああ、噂の子？一組よ。鳳さんは2組だからお隣ね。そう  
そう、あの子1組のクラス代表になつたらしいわよ。やつぱり織斑  
先生の弟さんなだけはあるわね」

鈴 「2組のクラス代表って、もう決まっていますか?」

受付 「決まつてるわよ」

鈴 「名前は?」

受付 「え?ええと・・・聞いてないわの~。」

鈴 「なにもしませんよ。ただお願いしようつと思つて。代表あたして譲つてつて」「ニコニコ

## 代表就任パーティー

〈夕食後、寮内食堂〉

ク女A「というわけでっ！織斑くん、おめでとう！」

ク女S「おめでとー！」パン、パンパーン！

一夏 「・・・・・」

一夏（めでたくない。ちつともめでたくないぞ。なんなんだこのパーティーは！？）壁をチラリ

一夏（なにに、『織斑一夏クラス代表就任パーティー』か。・・・余計にめでたくなくなつたな。自分のためにパーティーまで開いて祝ってくれるのは有難いけど）

一夏（当の本人があんまり気乗りじゃないのが問題だよな。そりややるからには全力で取り組むけどさ・・・複雑な心境だ）

ク女A「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ

ク女？「ほんとほんと」

ク女B「ラッキーだつたよねー。同じクラスになれて

ク女？「ほんとほんと」

一夏（あれ？相槌うつてるあの子って2組だつたよつな……気のせいいか？というか人数多くないか、30名以上絶対いる）

第「人気者だな、一夏。楽しいだろ？」

一夏「……あの、なにやらお怒りですか？第さん」

第「ふん」

薰子「はい！突然ですけど新聞部でーす！今日は話題の新入生、織斑一夏君とグラハム・エーカー君に特別インタビューをしに来ました、イエ～イ！」

薰子「あ、私は2年の薰子、一応新聞部副部長をやつてるよ。よろしくね。はいこれ名刺」

一夏「あ、これは」親切にどうも……といつか何で名刺なんてもつてんの？」

薰子「ん？カッコいいからだよーではではばり織斑君ークラス代表になつた感想や意気込みをどうぞー」

一夏「えーと……HSの総装着時間は少ないですが、それが戦力の決定的差ではないことを教えてやろうと思ひます」

第（なんで妙に芝居がかつているのだ？らしくもない）

薰子「おおー、いいねーいいよ、そつこつコメントもつとガンガンちようだい！」

薰子 「よし、次はグラハム君いつてみよー。クラス代表になる織斑君に同じ男性操縦者として一言どひつぞー！」

グラ 「前回の一夏の戦いを見たことは出来なかつたからな。括目せめてもひむかへ、一夏ー皆の想いを胸に、その手で未来を斬り開けー！」

第 (グラハムは相変わらずだな・・・)

一夏 「おう！まかせとけ。・・・氣乗りしてなかつたけど、だんだんやる氣が湧いてきた！」

薰子 「よーし、今日はいいコメントが多くて助かるよ、改变する手間が減るからね。じゃあ、次はセシロニアちゃんもコメントりょうだい」

セシ 「わたくし、いつもこのコメントはあまり好きではありますんが、仕方ないですね」

セシ 「コホン。ではまず、どうしてわたくしがクラス代表を辞退したかと云ふと、それはつまり

薰子 「ああ、長ちうだからこりこりや。やっぱり写真だけちょっとだけ」

セシ 「が、最後まで聞きなさいー！」

薰子 「いいよ適当に捏造するから。はいはい、とつあえず3人並んでね、写真撮るから」

セシ 「えつ？」

薰子 「注目の専用機持ち3人だからねー。いい絵になるよ、めりやつぱり」

セシ 「そ、そうですか・・・。あの、撮った写真は当然いただけますわよね?」

薰子 「そりゃもちろん」

セシ 「でしたら今すぐ着替えて」

薰子 「時間掛かるからダメ。はー、わざと並ぶ」

セシ（思いもかけずにグラハムさんと写真が撮れますわね。グラハムさんみたいに言つたら、『なんといつ僕偉い!』ってところから、ふふつ）

第 「・・・・・」

一夏 「何だよ、第?」

第 「何でもない」

第（じじで、自分も一緒に撮りたいと言いたらどれだけ楽なのだろうな、ハア）

薰子 「それじゃあ撮るよー。35×51÷24はー?」

一夏 「は?え、えっと・・・」

グラ 「およそフロだ！一の位は無視させていただく

薰子 「それじゃダメだよー。一の位も仲間に入れてあげないと。

答えは74・375でしたー」

一夏 「暗算でそれは難しそぎ

」

パシャー！

セシ 「・・・な、なんで全員入つていますのー！」

ク女A 「セシリ亞だけ抜け駆けはないでしょ～」

ク女B 「クラスの思い出になつていいいじゃん

ク女? 「ね～」

セシ 「う、ぐ・・・」

セシ （そんな・・・せつかくのチャンスが・・・）

代表就任パーティー（後書き）

早く戦闘シーンを書きたいです。W

## 鈴と一夏

（翌朝、IS学園1年1組）

ク女A「織斑くん、グラハムくん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

一夏「転校生？ いまの時期に？」

ク女A「そう、なんでも中国人の代表候補生なんだってさ」

一夏「ふーん」

グラ（中国か・・・ん？ 最近ここで中国人に会ったような・・・。  
・そうか、あの少女がもしかして）

セシ「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入から」

竇「でも、このクラスに転入していくわけではないのだりつ?  
騒ぐほどのことでもあるまい」

ク女A「うん、たしか隣の2組に転入するって聞いたよ」

一夏「隣かあ、どんなやつなんだろうな」

グラ「ああ、おおいに気になるな」

セシ 「！？ 気になりますの？」

グラ 「む？ それはそうぢだらう。相手は国家代表候補生、つまり専用機持ち。私には、無視する」とはできないう」

セシ 「なんだ、そりこいつ」とやすの。・・・よかったですわ」

グラ 「なにがだ？」

セシ 「い、いえ。何でもあつません」とよ。『気になつてくださいまし！』

篇 「・・・一夏、お前も気になるのか？」

一夏 「ん？ ああ、少しな」

篇 「ふん・・・。今のお前に女子を気にしてくる余裕があるのか？」  
「来月にはクラス対抗戦があるところだ」

セシ 「そう！ やうですわ、一夏さん。クラス代表を譲つたのですから、わたくしの分も活躍して頂かなこと」

一夏 「わかつてゐよ。まあ、やれるだけは頑張つてみるけどね」

セシ 「やれるだけでは困りますわー。一夏さんには勝つていただきませんと」

篇 「やつだぞ。男たるものやつな弱氣でどうあかぬ」

ク女A「織斑くんが勝つと、フリー・パスケットでクラスみんなが幸せだよ~」

グラ 「……皆はいつも言っているが、気にするな。気負いすぎては空回りするだけさ、いまの心持でちょうどいいと思つがな」

一夏 「サンキュー。そう言つてくれると助かるよ、ほんと」「ク女A「でもさ、今のところ専用機持つてるクラス代表つて1組と4組だから、余裕だよね~」

? 「 その情報、古いや」

? 「 2組も専用機持ちがクラス代表になつたの。そう簡単には優勝できなかから」

一夏 「! ? 鈴・・・? お前、鈴か!」

鈴 「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たつてわけ」

グラ (やはり、彼女か。でも、先日と雰囲気が違つような……)

一夏 「何格好付けてるんだ? すげえ似合わないぞ

鈴 「んなつ・・・! ? なんてこと言つのよ、アンタはー。」

グラ (おお、元に戻つたな。どっちが地かはしらないが)

千冬 「おい

鈴 「なによ!？」 クルツ、バシン！

千冬 「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

鈴 「ち、千冬さん・・・」

グラ （・・・顔色が変わったな。どうやら千冬女史が得意ではないらしい。まあ、ことあるごとに出席簿が飛んできては誰でもそうなるか）

千冬 「織斑先生と呼べ。さつさと戻れ、入り口を塞ぐな。あとグラハム、私は理由もなしに力を振るうことはない。失礼なことを考えるな」

鈴 「す、すいません・・・」

鈴 「またあとで来るからねー逃げないでよ、一夏！」

千冬 「さつさと戻れ」

鈴 「は、はいっ！」 タタタタツ！

鈴 （邪魔が入っちゃったけど・・・一夏、すぐにあたしだって気付いてくれたな・・・これっていい反応よね！）

一夏 「つていうかアイツ、IS操縦者だったのか。初めて知った」

幕 「・・・一夏、今のは誰だ？ 知り合いか？ えらく親しそうだったな」

ク女 s 「ねえねえ、一夏くん。転校生との関係性を詳しく教えてよ」

千冬 「SHRの時間は始まっている。席に着け馬鹿ども」 バシ  
バシバシン！

一夏 「うーん、しかしながらまたこう知り合いとばっかり再開するんだろうな。人生っていうのは不思議なものだなあ」

グラ 「ああ、人生っていうのはそういうものさ、不思議なことばかりで辟易しかねん」

千冬 「お前は早く席につけ！」 バシ-

## 一夏と鈴、そのⅣ

△ 昼放課、食堂 △

範 「おー、一夏ー朝の転校生とはどういつ関係だ？ 詳しく聞かせてもらひやー。」

一夏 「あー、わかつた、わかつた。だけどまづは席に着く」とにじよづぜ。えーと、どこが空いてないかな」 キョロキョロ

鈴 「やつと来たわね、一夏ー。」

一夏 「おお、鈴、奇遇だな。席空いてるみたいだし、同席してもいいか？」

鈴 「え？ す、好きにすれば？ ・・・といつかその為に席確保しておいたんだけど」

一夏 「ん？ なにか言つたか？」

鈴 「べ、別に」

一夏 「やつか。じゃあお言葉に甘えてお話を聞かせてやつや。ガタツ

一夏 「それにしても久しぶりだな。ちよつと丸一年になるのか。元気にしてか？」

鈴 「げ、元氣にしてたわよ。アンタ」いや、たまには怪我病氣しなさいよ」

一夏 「どうこう希望だよ、そりや・・・」

一夏 「で、いつ日本に帰ってきたんだ? おばさん元氣か? いつ代表候補生になつたんだ?」

鈴 「質問ばっかしないでよ。アンタ」いや、なにエレ使つてゐるよ。」ニコースで見たときびっくりしたじゃない」

鶯 「あー、ゴホンゴホン」

鶯 「一夏、なんぞうどう関係が説明して欲しいのだが」

セシ 「一夏さん、もしかしてこれからの方と付き合つてしまふの?」

鈴 「べ、べべ、別に私は付き合つてるわけじゃないけど・・・」

一夏 「やうだよ。鈴とはただの幼馴染つて関係だよ。なんどそんな話になるんだ」

鈴 「・・・・・」

一夏 「ん? なんで睨んでるんだ?」

グラ 「・・・・お前のせいだと私は思つや」

グラ 「とにかく、幼馴染だと? なんで同じ幼馴染だといつ鶯が

知らない様子なのだ?」

一夏 「えーと、それはだな。箒と入れ違いで転校してきたんだよ。箒が引っ越したのが小4の最後で、鈴は小5の始めに来た。そこから中2の最後に鈴が国に帰るまで一緒にいたんだ」

一夏 「で、鈴。こっちが箒。ほら前に話しただろ? 小学校からの幼馴染で、俺の通っていた剣術道場の娘」

鈴 「ふうん、そうなんだ」

鈴 「初めまして。これからよろしくね」

箒 「ああ、じゅりりんわ」

グラ (表情)そ笑顔だが・・・この禍々しいプレッシャーはなんだ!?)

<夜、寮内一夏・箒の部屋>

鈴 「といつ訳で部屋、あたしと代わってね」

箒 「といつ訳とはじつといつことだーなぜ私がそんなことをする必要がある?」

鈴 「いやあ、年頃の男女が同じ部屋だとなにかと気苦労が絶えないでしょ? その点あたしは、そんなこと微塵も気にしないから。よかつたら代わってあげようかと思つて」

「必要ない！ たしかに気苦労が多いが、別に嫌ではないからな。それに！」これは一夏と私の問題だ。部外者はく

鈴 「大丈夫、あたしも幼馴染だから。部外者じゃないわよ」

「だから、なんでそれが部外者ではない理由になるのだ！」

一夏 「…………」

一夏 （一体、どうしてこうなったんだ？）

一夏 （簫とアリーナで訓練した後に鈴と会って、それで少し談笑をしただけなのに……なんでこんな状況に？）

一夏 （ああ、なんで気付けなかつたんだ。気付いて回避するべきだつたのに……先生、この空氣にもう耐えられません！）

一夏 「なあ、鈴」

鈴 「うん」

一夏 「それ、全部荷物か？」

鈴 「そりだよ。あたしはボストンバック一つあれば足りるでも行けるからね」

一夏 「あらためて思うけど、すでにワットワークの軽さだな。」

「で、とにかく、あたしも今日からここで暮らすから」

「なー? そんなこと私が許さないぞ。ここは私の部屋だ!」

鈴 「でも、ここは『一夏の部屋』でもあるでしょ? なら、問題なしよ。ねえ、一夏は別にいいよね?」

一夏 「そりや、別にい・・・何でもありません」

一夏 (鶴、睨みすぎだぞ・・・。メテユーサも真っ青な眼力だよ)  
ガクブル

鶴 「とにかく! 部屋は変わらない、これは決定事項だ。出て行くのはそちらだ、早く自分の部屋に戻れ!」

鈴 「でさ、一夏。その・・・約束つて覚えてる?」

一夏 「や、約束?」

鈴 「うん、小学生のこりにした約束。覚えてる・・・よね?」

鶴 「む、無視をするな! んえい! よくも私を無視してくれる、いうなれば力づくで・・・」「ブンッ!」

一夏 「ちょ、馬鹿・・・」

バシインツ!

一夏 「鈴! 大丈夫か!?」

鈴 「・・・ふふつ、大丈夫に決まってるじゃん。今のおたしは代表候補生なんだから！」

一夏 （本当だ。ISを部分展開して見事に木刀を受け止める・・・ふう、よかつた、本当によかつた）

一夏 （・・・でも、完全に死角からの攻撃だつたぞ！？ それも突然の。ISの展開速度は人間の反射限界を超えないから、到底、生半可な実力では対処できない！）

一夏 （つまり、それだけの実力を、少なくとも死角からの攻撃に難なく対応するほどの実力を、鈴は持つてるってことか？）

一夏 （もしクラス対抗戦で鈴と当たつたら、俺は勝てるのか？）

鈴 「ていうかさあ、今の攻撃、生身の人間だつたら相当危ないよ？ いくら頭に血が上つても、最後のラインは守らなくちゃ」

竇 「う・・・」

竇 （また私は・・・。感情に任せて力を使つてしまふなんて、あの頃のままではないか・・・）

鈴 「ま、いいけどね」

一夏 「それで、一夏！ 覚えてるの？」

一夏 「え？」

鈴 「小学生のころの約束!」

一夏 「あ、ああ。え~と、ちょっと待っててくれよ。う~ん・・・  
あ~もしかしてあれか? 酢豚がビリビリがこうやつか?」

鈴 「あ、そりゃ~! それ!」

一夏 「たしか、こういつ内容だつたよな。『鈴の料理の腕が上が  
つたら毎日酢豚を』」

鈴 「うさうさ

一夏 「おひいてくれる』ってやつ

鈴 「う・・・・・・はい?」

一夏 「だから、鈴が料理出来るよ! になつたら、俺に飯を『う  
うじてくれる』って約束だろ?」

一夏 「いや~、我ながらたいした記憶りょ」 パーン!

一夏 「へ・・・・?」

鈴 「・・・・・」

一夏 (え? 今なにかまづい) と言つたか、俺? つて!?

のやつ、肩震わして・・・)

一夏 (も、もしかして、泣かせてしまったのか?)

一夏 「あ、あのだな、鈴。その・・・」

鈴 「さ・・・てい」

一夏 「は、はい?」

鈴 「最つつづ低! 女の子との約束を覚えてないなんて、犬に噛まれて死んじまえ!」 ダッ!

一夏 「お、おい! 待て、鈴!」 バタン!

一夏 「・・・まずい、怒らせちまつた」

鶴 「なあ、一夏?」

一夏 「は、はい」 (この世に人を震え上がらせる笑顔つてあるんだな・・・)

鶴 「馬に蹴られて地獄に落ちる」

一夏 「・・・はあ」

一夏 (どうしよう、鈴、明日には機嫌直つてるかな? 直つてないよなあ、やつぱり)

一夏 (ああ、なんでこんな面倒くさいとこになつたんだろ・・・  
助けてくれ、グラハム)

翌日、生徒玄関前廊下に大きな掲示があつた。表題は『クラス対抗

戦日程表』

一回戦、織斑一夏の対戦相手は2組

鳳鈴音だった。

## 一 夏と鈴、そのⅤ（後書き）

次回はようやく一夏と鈴です。

また、ちょっとしたサプライズもあるので「ひび」期待！

あと、通りすがりの髭達磨さんが、このううの素敵なイラストを描いてくれました。

まだ見てない人は『みてみん』でグラハムと検索してみてください！

## 不穏の前兆

△回日夜、HS学園・食堂△

鈴 「…………さ、一夏の奴なんて言つたと思つ?『毎日酢豚をねりてくれる』って言つたのよー?信じられない?」

鈴 「『ねりてくれる』って何よー?普通、毎日つていつたら……その、ああいつ意味じゃない!」

鈴 「まったく、何でアイツは」

グラ 「…………」

グラ (一体なぜ私は、このよつ様な状況に置かれているのだ?)

グラ (何やら愚痴られているが、困ったな。じつは話題は苦手なのだが……)

グラ (ハア……放課後、セシリ亞とHSの訓練をしたからな、小腹が空いたと思って食堂に来てみれば、この様か)

グラ (鈴が、なにやら物凄い勢いで料理をがつついでいたから声を掛けたものの……失敗だった。よもや自棄食いだったとは過ぎたことを悔やんでもしかたないが)

グラ (こんなことなら、セシリ亞を誘つてこねばよかつた。まあ、

グラ（とにかく、鈴は何について怒っているのだ？）（どうやら予想通り一夏に関係したことのようではあるが）

グラ（それにしても、凄い剣幕だな……一体何をしでかしたんだかな、一夏は……）

鈴「ねえ、あんたもさう思うわよね？」

グラ「む？……すまないがもう一度簡単に説明してくれ」

\* \* \* \* \*

鈴「つていう訳よ。どう？ 酷こと思ひでしょー。」

グラ「……」

鈴「もう一夏とは、しばらく口を利かないようにしてやる。そうすれば少しばかり反省して、むごつかから謝りに来るつてもんでしょう。」

グラ「……言い難いが多分一夏は来ないぞ」

鈴「えー？……」

グラ「付き合いはまだ短いが、一夏は私並かそれ以上に人の感情の機微や言動の裏を推し量るのが苦手そうだと感じたからな……」

グラ「それに、楽天的な部分もある。また鈴とは幼馴染なのだろう？」つまり気心が知れているところとだ

グラ 「おそらく一夏はそのうち機嫌を直してくれるだらうと考へて、何もアプローチしてこないぞ？」

鈴 「う・・・言われてみると、そうなる予感しかしない・・・」

グラ 「あと、これは私が言えたことではないが、一夏が鈍感すぎることも確かに悪い・・・が、明確に言ってなかつた鈴にも落ち度があるのでないか？」

鈴 「あう・・・め、明確になんて無理にきまつてゐるでしょ・・・」

グラ 「なら、一夏を許してやれ」

鈴 「な！？・・・い、嫌よ。むこうから謝つてこないと！」

グラ 「明確に言葉にしていないのに全てを分かれ、と期待するのは横暴すぎるだろ？？」

鈴 「そ、そうだけど・・・」

グラ 「ただでさえ、人と人とはすれ違い、たやすく争いや諍いを引き起こす」

グラ 「言葉なくして、対話なくして分かり合えるほど人間は賢く、便利な生き物ではない」

グラ 「だが、逆に・・・十分な対話が、話し合いがあれば人は、世界は分かり合えるはずだ。そう少年が教えてくれたように」

グラ 「だから、鈴。憤る気持ちも分かるが遠ざけるのではなく、

逆に一歩近づいてみてはどうだ？ 無論、こちらから

鈴 「でも・・・その、気まずいし」

グラ 「たとえ気まずくとも、言いたい」とはしつかつと言つておけ・・・そうしたくとも、絶対にできなくなる前に

鈴 「グラハム・・・」

鈴 「・・・いや、すまない。今のは、ただの私の感傷だ。鈴には関係ない、忘れてくれ」

グラ 「・・・うん、そうよね。あんたの言つ通りだよね。やっぱり、もう一度一夏と話しかけてみることにする」

グラ 「さうか」

鈴 「ありがと。おかげで、ちょっと気持ちがスッキリした」

グラ 「なら、なによりだ」

鈴 「ふう。それにしても、あんた普段の言動と違つて意外と大人な考えを持つてんのね。驚いた」

グラ （まあ、実際34で、世間一般から見れば立派な大人だからな。）れぐらには、言えないといけないだろ（う）

鈴 「でも、話し合つかあ。どうしたらいいんだろ？ やっぱり気まずいしなあ・・・」

グラ 「・・・だつたら、いつしたらどうだ? わたしも田中女史に聞いたが、クラス対抗戦の一回戦の相手は一夏らしい」

鈴 「えー? それ本当?」

グラ 「ああ。そこでだ、負けたほうが勝った方を遊びに連れて行く、という内容の賭けを一夏に持ちかけるんだ。この際、約束の件は置いておいて」

グラ 「一夏はセシリアの時もそうだが、だいぶ負けん気が強いようだ。おそらく乗つてくる。そうすれば、後は試合に勝つだけだ」

・・という作戦だが、どうだ?」

鈴 「うん・・・それなら自然に出来そうな気がする」

鈴 「でも、あんた仮にも1組でしょ。いいの? あたしに勝てだなんて」

グラ 「別に私は勝つてくれと応援するわけではない。案を提示しただけだ。もちろん一夏を応援させてもらひながら、問題ない」

鈴 「ふつと。なら遠慮せずに一夏を倒せばいいことね。・・・よし、そうするわー!」

鈴 「あらためて今日はありがとね。わざまでは沈んでたけど、一気に元気になつたわ。じゃあ、あたしは部屋に帰つて寝ることにするから、それじゃ!」「ダツ!」

グラ（・・・若いな。これが青春か、悪くない）

〈某日、某国某所〉

？？「・・・へい、わかつてますつて。奴さんは貴重なサンプル、必ず生かして連れ帰れってんでしよう？」

？？「くくう、その通りだよ。彼は絶対に必要不可欠な存在だからね・・・僕による僕の計画、人類を革新へと導くこの僕のために」

？？「そうですかい。正直、興味ありませんわ。俺は戦争が出来りやあ、それで十分です」

？？「くくふう、確かに君には関係のない話だね。仕事をこなしてくれさえすれば、それでいいよ」

？？「殺しちゃならねえ、ってのは俺の性分にあわねえが・・・奴さん以外は別に構わないですよね、大将？」

？？「くく君も大概だね・・・いいよ、彼を生きて連れて来さえすれば、後は何をしてもね」

？？「くくじやあ、成功を祈つていろよ。くれぐれも慎重にね・・・」

？？「ペッ！」

？？「へへっ、ひさしごりに愉しくなつてきやがつた！ ようやく、じつが使えるなあ、おい！」

？？

「 い た だ く ゼ エ ． ． ． 織 斑 一 夏 ！ 」

## 不穏の前兆（後書き）

書き忘れていまして、すいませんが。  
グラハムの部屋は監視等の理由で個室となっています。

クラス対抗戦当日、第一アリーナ第一試合。そのアリーナ内、中空にて織斑一夏と鳳鈴音は対峙していた。どちらとも、その身にエスを纏つて。

噂の新入生同士の戦いとあって、アリーナは全席満員、前日までに生徒による指定席騒ぎまであったほどだった。通路ですら立ち見の生徒に埋め尽くされている。それでも收まりきらなかつた生徒や関係者はリアルタイムモニターによる中継を鑑賞している。

「一夏、この間の賭け……覚えてるわよね？」

鈴音が一夏に静かに問いかける。その声は試合前だというのに驚くほどに落ち着いている。代表候補生としての実力と経験がその冷静さを裏打ちしていた。

「ああ、しつかり覚えてるよ。心配するな。この試合、鈴が勝つたら俺が鈴を遊びに連れて行く、だろ？」

「そりゃ。あと言っておくけど……ふ、2人でだからね？　いいわね？」

「ああ。その代わり、俺が勝つたらこの間の理由を説明してもらうからな」

「う・・・わ、わかってるわよ」

鈴音に少し動搖の色が奔る、その頬はほんのり赤く染まっていた。  
どうやら、試合後のことを見案しているようだ。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

試合開始に向けてアナウンスが流れる。それに促され一夏と鈴音は移動する、その距離は5メートル、試合開始は目前だった。

「一夏、全力で来なさいよ。あたしも全力でいくから」

先程の動搖が完全に消えた声で鈴音は言つ。すでに、その目は戦士のそれに変わっていた。代表候補生に相応しい集中力を感じさせる。

「おー! 当たり前だ、最初から全力で行かせて貰うぞ!」

負けじと、一夏も気迫のこもった声で応えた。その集中力は勝るとも劣らない程、非凡なものを感じさせられる。勝敗の行方は誰にも分からぬだろうと言えた。

『それでは両者、試合を開始してください』

ブザーの音がアリーナに轟き、試合の火蓋は切って落とされた。  
短くて長い、波乱の試合の。

ブザーの音が鳴り終わる刹那、両者は動いていた。一夏は瞬時に『雪片式型』を形成、展開。鈴は異形の青龍刀、『双天牙月』を手に接近する。

ガギインツ！！

盛大に轟音を上げ、初撃が斬り結ばれる。三次元躍動旋回をビリ<sup>クロス・グリッド・ターン</sup>にかこなすも、体勢を大きく崩したのは一夏。

「ふうん。初撃を防ぐなんてやるじゃない。けど」「

鈴音はその隙を見逃さない。『双天牙円』をバトンのように自由自在に回転させ、追撃を加えんと再度肉薄する。両端に刃のついたそれは、縦横斜めと鈴音の手によつて変幻自在に角度を変えて一夏を攻め立てる。それは、高速回転をしていることも加わり、捌くことは並大抵ではない。

(まよい！)のままじや消耗戦になるだけだ。一度距離を取つて)

だから、一夏がこの思考に至るのは至極当然であった。それは現状、最善の一手の一つでもある。鈴音が近接武装しか持たないという前提条件の下での話に限定されるが。

「甘いっ！…」

鈴音のHS。第三世代『甲龍』の特徴の一つ、肩の非固定浮遊部位であるスパイク・アーマーがスライドして開いた。中心の球体が閃光を孕むと同時に、一夏が見えざる衝撃に『殴り』飛ばされる。

「今のはジャブだからね」

にやりと不敵な笑みを浮かべ、まだ状況把握の出来ていない一夏

に牽制に続いて本命を撃ち込む。

「ぐっー」

ドンシ！ とこう鈍い音を上げ一夏が地面に叩きつけられた。鋭い痛みがシールドバリア越しに彼に届き、顔を歪ませる。すでに、エネルギーの6割近くが削られていた。状況は誰が見ても一夏の劣勢。挽回の一手が早急に必要な状態に追い込まれていた。

↙アリーナ内ピットへ

竇 「何だあれはー！？」

セシ 「『衝撃砲』ですわね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃、それ自体を砲弾として撃ち出す・・・第三世代兵器の一つですわ」

グラ 「つまりは、不可視の砲身と弾丸といふことかー！？」

セシ 「ええ、おさらば。わたくしの砲撃をあそこまで避けた一夏さんが、いつも容易く被弾しているところを見ると・・・その可能性が一番高いですわ」

グラ 「砲弾のみならず砲身まで見えないとは厄介だな。射線予測による回避が困難になる・・・どう戦つもつだ、一夏」

竇 （一夏・・・どうか無事でいてくれ）

「よくかわすじやない。衝撃砲『龍砲』は砲身も砲弾も田に見えないのが特徴なのに」

試合開始から10分。もう被弾することは許されない一夏はハイパー・センサーを『龍砲』に集中させ、空間の歪み値と大気の流れの微妙な変動を感じし辛うじて回避を成功させていた。だが、防戦一方である。回避に精一杯で接近することが出来ない。しかし、例え接近することが可能となつても再度『双天牙月』の餌食になるだけだ。

この劣勢のなか、彼は姉のことを思い出していた。先週の姉との訓練を。彼の右手が決意を表すかの如く『雪片式型』をきつく握りしめた。

(『バリアー無効化攻撃』、この一撃に全てを賭けるしかない。俺に残された唯一の切り札、『イグニッショングースト瞬間加速』。出しどころを見極める!)

鈴音を翻弄するよつこ、衝撃砲を避けながら縦横無尽に一夏が疾走をはじめる。幸いなことに、加速性能においては『白式』は『甲龍』に勝っていた。少しづつ、だが確実に鈴音が翻弄され始める。

「ちい、ちょこまかと鬱陶しい！」

業を煮やした鈴音が苛烈な連射を開始する。その弾丸は雨のよつに一夏に迫る、当たればひとたまりもない。が、十分にスピードのついた白式を捕らえることは出来はしない。

いくら燃費と安定性を第一に設計されている『甲龍』とはいえ、所詮第三世代。無理な連射をすれば直ぐに限界が来る。そして……

雨が止む。

(……「じじだッ！」)

それは、絶好のタイミングだった。一夏はそれを逃さなかつた。

「うおおおおおっ！」

最初にして最後の一撃が叫び声とともに振るわれる。一夏は『瞬間加速』を発動する 築だつた。

ズッドオオオオンッ！－！－！

直前、爆音と共にアリーナ全体が震える。ステージ中央からは爆炎や粉塵が立ち込めた。その中には、妙に赤い物も混じっている。何かが、アリーナの遮断シールドを破り進入してきたのだった。次第に、煙は薄れた。だが、赤い粉塵だけは何時までたつて其処にあり、むしろその濃さを増していく。

「……さあ、始めようじゃねえか。ＩＳ同士による、とんでもねえ戦争ってヤツをよおー！」

そこには、鮮血の暴君がいた。

鮮血の暴君（後書き）

今回はいつもと形式が違う地の文ですが、どうでしょうか？  
少しほんのりやすくなりましたかね？

## アリー・アル・サーチェス

「な、なんだ？ 何が起こって・・・」

突然の衝撃、爆発に状況の把握ができていない一夏は動搖を隠しきれていない声音で呟いた。と、白式が鈴音からのプライベート・チャネルによる通信があることを伝える。

『一夏、試合は中止よー すぐにピットに戻つて!』

同じく鈴音も動搖が多分に混じつた声でそう伝える。その様子からは、現在の状況がかなり逼迫したものだということが感じられるだろう。一夏もそれを感じとり面喰らつが、それも束の間、ISのハイパー・センサーが緊急通告、即ち何者かにロックオンされたことを伝えたことにより緊張に溢れた表情へと移った。

(なつ！？ 所属不明のIS？ もしかしてさつきの衝撃はそいつがアリーナに侵入したことによるものだつてのか？)

一夏の予想通り、それは事実であった。そして、一夏もそれを確信していた。現在の状況からは疑う余地もない。だからこそ、一夏はさらに動搖を大きくする。アリーナの遮断シールドとはISのシールドと同等かそれ以上の性能を誇っている、そしてそれを破り侵入したIS。つまりは非常に強力な攻撃力を有しているものにロックされていることに他ならない。

『一夏、急いで!』

「お前はどうするんだよー!？」

まだ、初めての相手との回線の開き方がわかつていない一夏はオーブンチャンネルを使って聞いた。それに伴い鈴音もチャンネルを切り替える。

「あたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ!」

「逃げるつて・・・女を置いてそんなことできるか!」

「馬鹿! アンタの方が弱いんだからじょりがないでじょうが!」

いつも遠慮なく痛い事実を言われてしまつては、一夏には返す言葉はない。

「別に、あたしも最後までやつ合ひつもつはないわよ。こんな異常事態、すぐに学園の先生たちがやってきて事態を收拾」

「エシュウン!」

「あぶねえつ!..」

間一髪で一夏が鈴音を抱かかえ攫つ。さつきまでいた空間は赤い粒子の塊が通過していた。

「ゲーム兵器!.. しかも、セシリ亞のものとは比べ物にならないほど強力だつて!..」

ハイパーセンサーが伝える事実はどれも驚嘆するものばかりだつ

た。そして一夏の動搖はさらに増すこととなる。

△アリーナ内ペナント△

セシ 「一体全体、なにがどうなっていますの！？」

真耶 「わ、わかりません！ アリーナ外から所属不明のIISが侵入してきたとしか・・・」

範 「！？ おい、今度はそのIISが攻撃を仕掛けてきたぞ！」

範 「しかもビーム兵器・・・ッ。先生、早く救援を！ このままだと一夏たちが・・・」

千冬 「ああ、わかっている。すでに手配した。いまいりの部隊は突入する直前のはずだ。安心しろ」

千冬 「なに、教師陣が到着すれば高がIIS一機。すぐに事態は収拾す」

？？？』 フフッ、やつはさせないよ

真耶 「・・・はい。えッ！？ た、大変です！！」

真耶 「たった今、救援部隊から何者かのクラッキングによりシステムの権限が奪取、こちらの操作を受け付けないと報告がありました！」

真耶 「そして、アリーナ内の全隔壁が封鎖。さらに、遮断シールドレベルが4に変更されます。部隊の突入は不可能です！」

第 「そ、そんな・・・」

セシ 「ま、まさかこれも侵入者の仕業ですか？」

千冬 「この状況から見るにそれしか考えられないな。厄介なことを・・・。これでは避難することも救援に向うこともできない」

千冬 「山田先生、すぐに緊急事態として政府に助勢を。それと、3年の精鋭をシステムクラックに。遮断シールドを解除できしだい再度突入を試みる」

セシ 「はああ・・・。今は待つていいことしかできないのですね・・・」

千冬 「言つておくがシールドが解除されてもお前は突入隊には入れない。大人しくここに居るんだぞ？」

セシ 「な、何でですのー！」

千冬 「ブルー・ティアーズは一対多向きだ。多対一ではその真価を発揮できない。それに、お前は所詮候補生だ。まだまだ未熟すぎる。フレンドリーファイアの可能性も高い」

セシ 「う・・・」

千冬 「また連携訓練は？ その時のお前の役割は？ ビットの配置は？ 味方の構成、敵のレベルは？ 連続稼動時」

セシ 「も、もういいですわ！ 結構です。わかりました。・・・はあ、言い返せない自分が悔しいですわ・・・」

千冬 「ふん、わかればいい」

千冬 「そして、勿論だがお前も同じ様な理由で突入は許さないぞ。此処で大人しくしている。いいなグラ・・・」

千冬 「・・・あいつはどこに行つた？」

セシ 「え？ そういうえばさつきから姿が・・・それに、篠さんも居ませんわ！」

千冬 「ちッ、あの馬鹿者共が・・・」

時間は少々遡り、正体不明のE.Sがアリーナのシールドを破った直後、あの赤い粒子を見た瞬間にグラハム・エーカーは走り出していた。何か考えがあつての行動ではない。あの粒子を見た彼の脳裏に浮かんだものは唯一つ、そうGNドライブである。彼の人生に大

きく関わり、そして歪め、変革させた存在、ガンダム。さらにその象徴、GNドライブ。彼はいてもたってもいられず、言わば反射の如くひた走る。

（・・・まさか。よもやここでガンダムと出会えようとは・・・やはり乙女座の私にはセンチメンタリズムな運命が付き纏っているようだ！）

言つまでもないが、件の侵入者がガンダムであるという確証はない。赤い粒子を見たのは一瞬、見間違いの可能性もある。また、それがGN粒子ではなく、似た色をしたまったく別のものの可能性だつてある。否、そちらの可能性の方が遙かに高いだろう。しかし、グラハム・エーカーには確定的な確信があった。言葉に表すことはできないが絶対の自信がある。まるで、それは本当に運命に縛られているかのように。

（だが・・・あの粒子の色、もしもこの確信が本当であるならば、最悪の想定通りならば、一夏達が危険だ！ 危険すぎる！・・・）

グラハムは一夏達の下へとさりに急ぐ。前方からは、おそらく観覧席から避難してきたであろう生徒が見える。酷い混雑だ。誰もがみな我先に逃げようと争っていた。と、その時、けたたましい警告音が辺りに響き渡った。同時に、さらに前方、おそらく観覧席へと続く扉がある場所から悲鳴が聞こえてくる。見るとまだ避難していないものが大勢いるにも関わらず、扉の隔壁が降り始めていた。

「ちいッ！ 邪魔者は入れないということか。・・・つれないな、ガンダム！」

グラハムは即座にID、フラッグを装着。生徒達の頭上を駆け抜

ける。次いで最早半分ほど閉まりかけている扉に滑り込むように入る。ここまでは、上手くいったが油断はしていられない。グラハムは観覧席を引き続き駆け抜け、一夏の下へはこの先の扉を抜ければすぐだ。だが、隔壁は既に人がギリギリ入れる程度までに降りきつっていた。グラハムはフラッグを変形、尚もスピードを増し、扉へと突っ込む。

ほぼ同時に、隔壁は重厚な音を立てて完全に閉じられた。何人もそこを通ることは不可能となる。だが、観覧席にグラハム・エーカー、その人の姿はなかつた。

「ちよつ、ちよつと、馬鹿！ 離しなさいよ！」

「お、おい！ 暴れるな。 つて馬鹿！ 凳るなよ！」

おそらく一夏には何の問題も、他意もないだらうが、鈴音にはあつた。お姫様抱っこをされている恥ずかしさに、たまらず一夏を殴りつける。

「う、うるさこつるさこつるさこつー！」

「だ、大体、どこ触って 」

そして現在の状況に似つかわしくない遣り取りを繰り広げる一夏と鈴音を見ながら半ば呆れる人物が一人。ここはアリーナのステージ内、本来ならば居るのは一夏と鈴音だけ、もしそれ以外の第三者がいるとすればただ一人。そう件のIS、その装着者である。

(おい、おい、仮にも未確認のISが目の前に居るんだぞ。しか

もついたつき牽制してやつたばかりなのに、お気楽すぎるだろ。まあ、さつきはいい動きをしたが、所詮学生ってことですかい）

彼の名前はアリー・アル・サーチェス。かつて優秀な傭兵、MSのパイロットだった男だ。だが、これは本名ではなく、数ある偽名の内の一つに過ぎない。その本名を知るものは既に一人としていかつた。戦争が好きで好きで堪らない、人間のプリミティブな衝動に殉じて生きる最低最悪の人間の本名を知った者は、深く関わった者は皆死んでいく。彼はまた、グラハム・エーカー同様に紛れ込んだ存在でもあった。あのソレスター・ビーリングとリボンズ率いるインベイターとの戦いの最中で戦死し、グラハムよりも先に辿り着いた。だが、グラハムとは違い彼の身体は死ぬ直前までの姿と同じであり、若返つてはいない。なぜ自分は此処にいるのか、その疑問も最初はあつた様だが、彼は直に順応しその疑問は搔き消えた。じつに強かな人間である。戦いが、自分が生きる場があれば彼はそれで満足なようだつた。

サーチェスは鬱陶しそうにその手にあるGNバスター・ソードをライフルモードで連射した。それは一夏達の注意を引く牽制であり当てるつもりは毛頭ない。結果も同様に当たりはしなかつた。次にサーチェスは同じくGNバスター・ソードを今度は剣として大きく振るつた。周囲の煙を振り払うために、注意を引いた一夏達に自らの姿を見せ付ける為に。

「なんなんだ、こいつ・・・・」

一夏の驚きは尤もだつた。目の前にいるのは、姿からして異形のISだつた。深く濃い、それこそ血のような色をしたその体躯。人型からは少々逸脱した長い手足を持つ機体設計。背部と両脚部の三箇所から絶えず溢れ出る先刻のビームと同じ赤色の粒子。手に握られた、その身体の半分以上もの大きさの巨大な大剣。

そして、何よりも特異なのは『全身装甲』であることだった。通常、ISは部分的な装甲しか形成しない。『全身装甲』など一夏にとっては前代未聞だった。このことから相手は特別な存在であることが容易に推し量れる。また、全長も普通ではない。白式の優に1.5倍はあるその全身からは不気味な威圧感が漂っている。頭部のその顔も邪悪なデザインに感じられた。

「お前、何者だよ？」

「・・・・・」

当然といえば当然だが、一夏の予想通り謎の乱入者、サーチェスは呼びかけに答

「・・・・・俺か？」

えてしまった。

「！？ そ、そうだ。あんた何が目的だ？」

「目的ねえ。・・・それはテメエだよ！ 織斑一夏あ！」

突如、狂氣の声を上げサーチェスは襲い掛かった。一夏の視界は鮮血の赤へと染まる・・・。

アリー・アル・サーチェス（後書き）

更新が遅くなってしまい申し訳ありませんでした。

VS サーシューズ？

突如、一夏に肉薄したサーシューズはそれを両断せんとGNバスター・ソードを頭上から振り下ろした。しかし、対する一夏は咄嗟のことにながらもぎりぎりでその斬撃を受け止める。雪片とGNバスター・ソードが撲ち合つたことによる盛大な金属音が辺りに響く。

「ツ！・・・俺が目的だつて？　どうこうことだよ？」

「・・・」

一夏の質問に無言を貫きつつサーシューズはさりげなく猛烈に斬撃を繰り出す。だが、苛烈と言つても彼の実力の半分どころか三分の一も発揮されていないものだ。それでも、未熟な一夏には身に余るもので数度の斬撃を弾く度に状況は悪いものへと追い込まれていく。

「くッ！　つ、強い・・・」

「はッ！　びつじた、どうしたあ！　その程度か？　もつと俺を楽しませてくれよなあ、ええつ！　織斑一夏さんよおつ！」

「なッ！？　しまつ・・・」

一瞬の硬直、隙。それをサーシューズは見逃さず、GNバスター・ソードを真上に斬り上げる。すると、いとも簡単に雪片が一夏の手を離れ弾き飛ばされていく。

「へッへへ、別に無傷で手に入れようだなんて思っちゃいねえ！  
悪いが痛い目みてもらつぜえ！」

雪片を失い、身を守る術をなくした一夏にサーチェスは容赦なく必殺の一撃、GNバスター・ソードを叩きこむ。・・・。

「・・・ああ？」

その直前、鈴音の衝撃砲『龍砲』の砲撃がGNバスター・ソードを大きく弾いた。

「ちよつと、あんた！　あたしの事を忘れてるんじゃない？」

鈴音がしてやつたりと、得意気に勝ち誇る。その隙に一夏は離脱、雪片を回収して鈴音の横に並んだ。

「・・・ハア、止めときな、嬢ちゃん。せつかくの命あつての物种、無駄に散らすことになるぜ！」

サーチェスが咳く。それは、静かな口調ではあるが並大抵の人間ならば震え上がり足が竦むであろう威圧感を内包していた。

「ふうん、向こうはやる気満々みたいね、一夏？」

「悪い、油断してた。次は大丈夫だ！」

「そつ。・・・一夏、あたしが衝撃砲で援護するから突っ込みなさいよ。武器、それしかないんでしょ？」

「その通りだ。・・・よし、行くぞ！」

互いの武器の切つ先を当てる」とを合図に一夏と鈴が即席ではあるがコンビネーションで飛び出す。

「ハッハア！　いいねえ、楽しくなつてきたじゃねえか。やつぱり戦いはこゝでなくつちやなあ……」

サー・シエスは心から歡喜の雄叫びを上げた。

^\アリーナ内ピット^

真耶 「もしもしー？　織斑くん聞こえますか？　鳳さん！　応答してくださいー！」

真耶 「・・・駄目です。何度試しても、無線が通じませんー！」

セシ 「ジャ、ジャミング？　ならEVAのプライベート・チャンネルは？　あれなら妨害されるなんてことは・・・」

真耶 「駄目です。システムクラックにより使用不可・・・」

セシ 「そんなことって・・・！？」

千冬 「落ち着け、一人とも。そつ焦る」とはない、直にシステム奪取は終わる。さうすれば、解決だ」

真耶 「お、お、織斑先生！　何を悠長なこと言つて居るんですか！？」

千冬 「興奮するな。ほり、コーヒーでも飲め。糖分が足りないからハイハイするんだ」

真耶 「……あの、先生。それ塩ですけど……」

千冬 「……なぜ塩があるんだ？」

真耶 「さ、さあ？ でもあの、大きく『塩』って書いてありますけど……」

千冬 「…………」

真耶 「あっ！ やっぱり弟さんのことが心配なんですねー…？」だからそんなミスを「」

千冬 「……ミスではない。塩コーヒーを飲もうとしただけだ。それに、Hチオピアでは砂糖でなく塩を入れるのが主流だ」

真耶 「此処は日本ですよ？ それに、もはや糖分がビツヒツ

千冬 「山田先生、ビツヒツ。まあ、グイッシュビツヒツ。ダイヒツヒツも効果があるらしいので」

真耶 「え？ でも塩なんて……」

千冬 「ビツヒツ」

真耶 「い、いただきます」

千冬 「熱いので一気に飲むといい

セシ （あ、悪魔が此処にいますわ・・・）

真耶 「あ、おいしい！」

千冬・セシ 「・・・え！？」

「やはり、あれは・・・間違いない、ガンダムッ！？」

アリー・ナ内ステージの物陰に隠れてグラハム・エーカーは一夏と鈴をあやすかの如く容易くあしらつているI.Sを観察していた。本当ならば今すぐにでも一夏たちの下へ駆けつけたい心を必死で抑えて。勿論、この間にも一夏達の身には危険が降りかかり続けているが、まだ動くことはできなかつた。男として戦士としては卑怯だと詰られる行為ではあるが彼は軍人である、無策で行動することを許さなかつた。策を弄しても同じ結果かもしれないが、失敗の可能性は減る。なのでグラハムは仲間を出汁に情報と機会を伺うことに一抹の罪悪感を感じながらも、過去に見た連邦軍の資料を思い出していた。

（あの特徴的なシルエットは・・・GNW-20000 アルケンガンドム！ 資料によれば搭乗者はアリー・アル・サーシェスだつたか・・・経歴はリボンズ・アルマークの直属の部下で、ソレスタルビーアング号での戦いで戦死となつていた筈だな）

愛がなせる業なのかななのか、彼はガンダムに関するデータなら常軌を逸している程に事細かに暗記をしていくようだ。流石はグ

ラハム・エーカーといったところか。

(ガンダムスローネッヴァイの発展系で、改良前のGNドライブ「」を3基使用している。武装はGNバスター・ソードを筆頭にファング等の強力なものがそろっているか・・・。これが、このままあのISに当てはまるなら厄介がすぎるな)

(それに搭乗者が戦死しているか・・・、まさか私と同様にしてということか？ それならば、一度話をして見たいが・・・)

(しかし、なぜ奴はバスター・ソードしか使わない？ 単なる出し惜しみか、それとも武装はMS時とは異なっているということか？ ならば勝機はあるが・・・)

グラハムは必死で情報を整理し、策を練り出す。が、その間にも戦闘は継続していく・・・、時は来る。

「!? ちいっ、考える暇も与えてくれないか！ ガンダムッ！」

グラハムは物陰を捨てフラッシュをフル稼働させて、アルケーへと迫った。

VS サーチェス？（後書き）

更新が遅くて本当に申し訳ありません。なにとぞお許しください。

∨S サーシェス？

「うつおおおおおおおおお…！」

一夏が気合の雄叫びを上げながら斬撃を繰り出す。

「おいおい、へなちょこな劍裁きだなあ！ なんで格闘戦専用機に乗つてんだよ？ 当たるわきやねーだろ！！ もつと頑張れねえのか、ええ？」

だが、その気合の一撃も実を結ぶことはなく空を斬るばかりであった。

「くつ・・・・・・・・」

「一夏つ、離脱！」

鈴音は一夏に警告しつつ、それを助けるために衝撃砲を放つ。が、サーシェスにそれは全て容易く回避されてしまつ。掠る事さえ許してはくれなかつた。けれども、まったく意味がなかつた訳ではなく本来の目的通りに一夏の離脱の隙を作ることには成功していた。

「はあ、はあ、はあ・・・・」

「大丈夫？ 一夏」

「ああ、なんとかな

一 夏は息も絶え絶えに答える。

「はははははっ！ 仕留め損なつたか……しぶてえ野郎だあっ！」

サーチョスが嘲りの意味を込め一夏に言葉をぶつけた。

（鞆ッ！ よく言ひやせ。あらかさまにて手を抜いていくせして…！）

事実、先程からの幾度の剣戦において一夏は何度となくミスを犯している。ほんの些細なミスであり、一夏の技量ならば仕方のないミスであったが、サーチョスの前では致命的なものとなる。それは一夏にもわかつていた。だから何度も落とされると直感し身体を強張らせたのだが、結果はサーチョスがその全ての隙をことごとく無視したというものになつた。そして彼は、一夏と鈴音の攻撃をゲームを楽しむかのように嬉々として避けることだけに注力していた、彼からの攻撃は牽制の意味合いのものばかりである。そう、誰がどう見ても一夏と鈴音は遊ばれているのであった。

「ああもうつ、一体なんなのよコイシヌ…！」

そのことは勿論一夏と鈴音両方ともに気付いている。また、この事実はプライドの高い鈴音の神経を逆撫でしているのもまた事実であつた。

「・・・鈴、あとエネルギーはビビのへりへり残つてる？」

「180つでとこいな」

対する一夏のエネルギーは鈴音よりも、さりに低い。雪丘の仕様が響いていた。

「このままじゃ、埒が明かない。俺は次に全力を懸ける。容赦なく・・・」

だが、悪いことばかりでもない。この時、一夏の頭には一つの策が思い浮かんでいた。彼が為し得る事の出来る最大の策が。

「全力も何もその攻撃 자체が当たらぬじゃない」

「次は当てる」

「言い切ったわね。じゃあ、あたしも負けてられない！」

一夏の考えを察してか、鈴音はニヤリと不敵な笑みを浮かべた。その表情はとても活き活きしている。

（へえ、なにか策があるみてえだな。あんだけ遊んでやつたのに、その心意気は評価してやるよ。さて、なにを仕掛けてきやがる？）

サービスの表情もまた、さらに活き活きとしたものに変わる。

「一夏、どうしたらいい？」

「俺が合図をしたらアーリツに向って衝撃砲を撃ってくれ。最大威力で」

「？ いいけど、当たらないわよ？」

鈴音は至極当然の疑問を返した。

(おいおい、オープンチャンネルでそんなことを話すなよ。丸聞こえだぞ。まあ、いいか。……だが、それじゃあさつきまでと大差ねえじゃねえか。これが策か？ 拍子抜けかよ)

一人の会話をオープンチャンネルで呆れながらも聞いていたサー・シェスは、その内容に落胆の色を見せた。

「いいんだよ、当たらなくともな・・・」

そんな2人の微妙な反応とはつづて変わって一夏は自信を湛えた瞳で呟いた。

「じゃあ、早速・・・鈴！ 行 」

一夏が鈴音への掛け声と共に突撃姿勢に移ろいつとした瞬間、アリーナのスピーカーが轟いた。

『一夏あつ！…』

「なつ！？」

一夏は急いで、スピーカーの発信源である中継室に手を遣る。そこには、見知った顔が一人。スピーカーの声の主、篠ノ之 築がいた。

『男なら・・・男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする！』

肩で息をしながら、簫は怒りや不安や焦燥が絹い交ぜになつたような表情で捲くし立てた。大音量によるハウリングが辺りに響く。

「ああたく、うるせえなあ・・・」

サーチェスが気に食わなさうに簫のほうへと注意を向けた。単に煩かったのか、それとも内容が癪に障つたのかは分からぬ。その手に握られたバスター・ソードがライフルモードへと変わった。

( ますい! )

「簫、逃げ！」

それを見た一夏は直に簫を逃がそうとするも、言ったところで間に合つわけがない。突撃姿勢に移行し加速する。アルケーの腕が上がるのが酷くゆっくりに見えた。

「鈴、やれ!!」

「わ、わかつたわよ」

一夏は続けざまに鈴へと合図を送る。グダグダな決行になるが仕方ない。最大出力のために甲龍の補佐力場展開翼が後方に広がつた。そして、そのまま一夏は驚くことにその射線上に入つた。

「な!? 何して？」

「いいから撃て！ 早く!!」

「くつー、どうなつても知らないわよ!!」

龍砲が轟き白式に莫大なエネルギーが叩きつけられる。通常ならこのまま吹き飛んでいくところだが、一夏はその瞬間『瞬間加速』を発動させていた。今の彼にできる虎の子の技を。

『瞬間加速』は簡単に分割すると、エネルギーの外部放出、それの再吸收、圧縮、そして放出という四つのステップで発動される。つまり理論的には最初のステップは飛ばしても構わないとになっているのだ、吸収するエネルギーさえあれば。さらに、『瞬間加速』の加速量は使用エネルギーに比例していた。また鈴音の衝撃砲が打ち出すものは弾丸ではない、エネルギーだ。理論の上ではこれも『瞬間加速』において利用可能ではある。

龍砲のエネルギーは莫大だ。攻撃を目的に作られているのだから当たり前だと言えるだろう。そして、『瞬間加速』の加速量は使用エネルギーに比例。もし龍砲程の莫大なエネルギーを下に発動すれば、それは通常の『瞬間加速』とは蟻と象程の差があるものになるだろう。これを一夏は期待していたのだつた。

だが、これは全て理論上だけの話だ。実際はそう上手くはいかない。『瞬間加速』の発動のタイミングを誤れば、エネルギーの吸収は失敗し、龍砲の直撃を受け容易く自滅だ。だから誰もしようとは考えないだろう。一夏もそれは理解していた。けれど、だからこそ意表が突けると一夏は考える。これは、危険な賭けだつた。

「 オオオオッ！…！」

一夏が、衝撃に顔を歪める。けれど、吹き飛んでいくことはない。その手の『雪片式型』が展開され輝きを放つた。一夏は加速する。龍砲の衝撃と『瞬間加速』の力により人智を超えたスピードで。賭けは一夏の勝ちだ。その勝因ただ一つ、咄嗟のことでも一夏と鈴音、彼等の呼吸は寸分狂わず合っていたということだった。

【零落白夜】・使用可能。エネルギー転換率90%オーバー。

一夏の意識が晴れ渡る。情報を知るではなく分かるという奇妙な感覚、何十倍にも跳ね上がったように感じられる集中力、そしてなにより全身を包む力を実感していた。

(俺は・・・今度こそ、箒を、鈴を、千冬姉を、大切な人を守る！ そう決めたんだ！)

「 邪魔すんじゃねえええ！！！」

全身全霊の一撃は爆発を生んだ。

VSサーチェス？

「・・・や、やったの？」

鈴音の眼前は、爆炎により遮られていた。赤い粉塵が花火の如く煌びやかに散つてゐる。そこは、今しがた一夏が飛び込んでいつた場所だ。

『・・・い、一夏？』

篠が不安と共に爆炎の中へ呼びかける。先刻までサーチェスによる悪意の渦中にいた彼女であつたが、怪我は何処にもない。中継室がGN粒子により蹂躪されていることもなかつた。砲撃は起こらなかつた。

けれど、篠の呼びかけに答える声はない。あるのは、舞い散つた塵が地面上に当たる微かな音だけだつた。

「・・・あ、ガツ！ グツ、あ、かはツ」

「！？」

突如、そこに異音が混じる。金属と金属がぶつかりあう打撃音に、何かの生き物の呻き声のようなものが・・・。

「い、一夏！？」

その音に最悪の想定をイメージした鈴音がすぐさま叫んだ。

だが、やはり返事はない。

鈴音は、一夏に当たるという可能性も厭わずに爆炎へと龍砲を放つた。煙を払うために。一夏の無事を確認したいがために。龍砲により、煙はゴウッといづ音と共に焼き消える。そこには一夏の姿が・・・あつた。

「 がッ、あぐッ・・・」

アルケー・ガンダムの右腕により首を驚づかみにされ、悶え苦しむその姿が。その身体には既にISは纏われていない。活動限界を向え、ガントレットへと戻ってしまっている。

「そ、そんな・・・」

鈴音が絶望の声をあげる。それは、一夏の苦しむ姿を見たからだけではない。サー・シェス、アルケー・ガンダムの状態を田の当たりにしたからであつた。

アルケー・ガンダム、つまりサー・シェスの姿は一夏の決死の攻撃以前となんら変わりがなかつた。傷一つ見受けられな・・・いや、違う箇所はあつた。サー・シェスの手にGNバスター・ソードは握られていない。代わりにその手は一夏の首を絞めていた。

あの攻撃のとき、一夏はGNバスター・ソードを斬り裂いていた。武器であるそれは、ISの装甲よりも何倍も堅い。それにもかかわらず斬り裂いた一夏の攻撃は、すさまじい破壊力だったといえるだろ。だが、一夏は狙つて武器を破壊した訳ではない。彼は、アルケー本体を斬り伏せる魂胆でいたのだった。あのスピードならば反応できないだろうという甘い認識の上での算段で。結果はご覧通り、一夏の予想に反してサー・シェスは対応しGNバスター・ソードによって防がれてしまったという訳だ。そして攻撃後の隙ができた一夏を捕らえ、今に至る。要するに、サー・シェスの方が何枚も上手だ

つた、一夏はそれを読み違えたということだけだった。まあ、サービスの実力を知らない一夏では仕方のないことだ。目の前の敵が本気でないことは分かつても、まさか実力の何分の一程度でしか發揮していないとは、とても思わないだろう。

「い、一夏を離しなさいよ！」

「ああ？ やなこつたね。こいつが俺の目的なんだよ！」

サービスはひどく高揚した声で鈴音に答えた。一夏の苦しみ姿が、自らの手で人を苦しめるのが余程嬉しいらしい。

「それにしても驚かせてくれたなあ！ あんな無茶をやらかすとは思つてなかつたぞ、ええ？ 危うく墜ちるといだつたじやねえか前つけてくれるんだよ？ ああ？」

サービスは挑発するかのように一夏へと言葉をぶつける。

「ぐッ・・・あ」

「おつと、これ以上やると死んじまつた。たくつ面倒くせえな。まあいい落とし前は、俺を斬ろうとしてくれたその腕にしつくとするかあ」

「生きて連れてきやいいんだ、五体満足の必要はねえ。さて、たっぷり苦痛にもがいて苦しめ、糞ガキが！」

サービスが空いている左手で一夏の右腕を掴み万力のように締

め上げる。そしてあいな方向へとゆづくつ曲げ始めた。

一夏が激痛に悲鳴をあげる。サーチャスはそれを気にも留めずに、罪悪感を欠片も感じずに尚も曲げ続ける。

「さあ、やめながせー！」

鈴音がそんな一夏を見ていられる筈もなく、たまらず突撃しようとする。が・・・

「邪魔すんなよ、嬢ちゃん。俺は気が立つてんだよ。こんなガキに一瞬でも冷や汗搔かされた」とになあ！ 墜ちちまいなあ、ファング！！」

アルケーの腰部から10機の何かが射出される。前進翼を展開し  
牙と名付けられたそれらは、セシリ亞のブルーティアーズを遙かに  
凌駕する三次元的な動きで変幻自在に鈴音に接近する。

「何よこれ！？」な・・・ぐうツー！」

その動きに翻弄されつつも必死でさける鈴音だが、長くは持たず  
に直に小型のビームサーベルを形成したファングの数機に激突して  
しまう。

その身体はあつけなく地面へと墜ちていった。

「はははっ！ そこで大人しくしておきな。さて、じゃあ気を取  
り直して腕、もううぜえ」

「ぐあがああああああああああああ！」

一夏に抵抗する力は既にない。なすがままにされるだけだ。

「恨むならテメエの弱さと、俺と敵対することになったテメエの人生を恨むんだな」

「そ、うか、ならむしろ私は感謝しないとな。こんな気持ちを味わうのは久しぶりだ。この昂り・・・堪忍袋の緒が切れた。許しはないぞ、ガンダム！――！」

漆黒の影がサーチェスへと斬りかかった。その両手の、プラズマブレイドが怒りとともに振るわれる。武器を失ったアルケーへと・・・

## VS サーチェス？（前書き）

予告の時間からかなり遅れた投稿になってしまい申しわけありません。

す o r z

自分の実力を過大評価していました。書くスピード無茶苦茶遅いで  
また、今回で part 2 終わらせるとかのたまつてましたけど無理  
でした・・・。ぐどいと感じると思いますがもう少しお付き合いく  
ださいませ。ではノシ

V.S. サー・シエス?

✓.✓.✓.✓

「あれあれ～？ どこのだれだよ～？ 」の東さんに断りもなく、こんなけしから・・・楽しそうない」とやつてゐるはー？」

束 「むう、なんか癪だなあ。ほんとは私がいつくん達にちょ  
つかいだすつもりだったのに」

束 「よし、ムカつくから邪魔しよう。うんうん、ストレス溜めるのはよくないよね、そうしよう」

束　「そうと決まれば、じいちゃんをじうじて、あつちをそうじて、あれをどつしてつとへ」

「はい、終了！ 超速いね。さすが天才、東さん」

「さて、それで、ちーちゃんたちがいるのかな？」

同時刻  
某國某所 >

？？  
「なに！？  
・・・システムが僕を拒絶した？」

？？ 「システムを奪取し返されたのか？」  
馬鹿な！ 僕の介入を  
阻めるなんて・・・

？？「まさか！？・・・なるほどね。人間の小娘風情が勝手をしてくれる。いつか罰を『えないと』いけてないね」

？？「まあ、今日は仕方ないとするよ。彼なら、やつてくれるだらうし、例え失敗しても次はあるぞ」

？？「来るべき対話はまだ遙か先なんだからね」

「はああああああ！」

気合の一聲と共に、カスタムフラッグが左右両の手のプラズマブレイドをサーチェスへと、一夏を掴むその腕へと振り下ろす。

「ちいッ、いきなり何だつてんだ!? クソが!!!」

しかし、いきなりの奇襲にもかかわらずサーチェスは、一夏をその手から放棄することと引き換えに回避を成功させていた。

サーチェスの手から解き放たれた一夏は、重力に引かれるまま地面へと落下していく。ISを失い、その身も満身創痍な彼はどうすることもできない。

だが、その落下していく一夏を初撃が失敗した隙を埋めるための後退とともにグラハムは抱き留めていた。

「一夏！ 大丈夫か？」

腕の中でぐつたりとしている一夏にグラハムは問いかけた。彼の腕が小刻みに震えている。眼前に突きつけられた友の傷ついた姿への悲しみや怒り、憎悪の一端がそこには現れていた。

「・・・グラ・・ハム。悪い・・俺じゃあ、敵わな・・かつた。また・・大切な人を・・守れなかつた」

痛々しい程に細々とした声で一夏は答えた。その小さな声のなかには、自分の不甲斐なさを実感した悔しさと口の矜持を碎かれた悲しみが湛えられている。

「・・・いや、違うぞ一夏。いま篝は無事だ。お前が行動したから、攻撃を未然に防いだから彼女は無事だ。お前は篝を、大切な人を守れた。お前は自身の矜持を貫いたのだ。誇りを持って！」

「そう・・・か。篝は・・無事なのか。ああ・・よかつた。俺は・・できたんだな。大切・・なひ、と・・を」

グラハムの言葉に救われたように、一夏は安らかな顔でその意識を闇へと落とした。

「ああ、その通りだ。一夏、疲れただろうから少し休むといい。あとは私に任せてもらひついだ！」

気絶した一夏を地面へと静かに寝かせながら、グラハムは語りかける。その声に怒りを露にして。

直後、グラハムは反転、フラッグを変形させ、地面に横たわる一夏を背にサーチェスに突撃する。

「よくも、私の友を！　ただでは済ましはしないぞ、ガンダム  
ウ！」

変形をはたしたフラッグがリニアライフルを連射しながらサーチ

エスへと驚異的なスピードで迫る。

「…？ て、てめえ、何でそれを・・・く、行けよお、ファン  
グ！！」

サーチェスの声をキーに、アルケーの腰部からファングが射出された。迫り来るフラッグを迎撃つ為にファングらは空中を変則的に移動しそれへと接近を試みる。

だが・・・

「小賢しい！ そんなもの、スピードで圧倒をせてもひづ…！」

フラッグへと近づき、ビームを展開させそれを撃墜しようとするファングであつたが、フラッグによる巧みな旋回、急変速に翻弄され攻撃は全て空を切ってしまう。

それだけではなく、グラハムの優秀な軌道予測によるリニアライフルによりファングの2基が撃墜されていた。非常に小型で尚且つセシリ亞のブルーティアーズ以上の機動を行うファングであるにもかかわらず、だ。怒りが、彼の能力を限界以上に、MSに乗つていたこと同等までに引き出しているのかも知れない。

「空いたぞ、そこだ！」

2基のファングが欠けたことにより空いた隙間をフラッグがすり抜けた。これで、間合いは詰まる。グラハムが得意とする接近戦へと持ち込める筈だ。

「ハツ！ 甘えんだよ。まだ、あるんだよバカがあ！ ファング  
！」

けれど、グラハムに思い通りにさせたるほどサーシュスは甘くはない。両腰部に温存しておいたファング2基を勝ち誇った笑みと共に射出した。至近距離からの攻撃、回避は不可能、そうサーシュスは思考し、勝利を確信する。

並大抵の相手にならば通用するそんな戦術を根拠にしてだが。

「小賢しいと言つた！ ぐうううツー！」

「殺人的なGだな・・・だが構つてなどいられない。人呼んで『グラハム・スペシャル』！」

もつとも、今のグラハムはとてもじゃないが並大抵の枠には収まらない。完全に常軌を逸していた。それを、サーシュスは理解していなかつた。無理もないが、奇妙な発言をする以外は一夏と同じく唯の学生だと認識てしまつている。そのため詰めの甘い戦術を使してしまつた。

「なんだとお！？」

グラハムは、強烈なGを物ともせずにトップスピードを維持しつつ人型へと変形しファングを往なす。そのまま、再度プラズマブレイド2対を展開して武器を持たないアルケー目掛けて振るつた。

その斬撃をサーシュスはGNシールドで難なく受け止める。プラズマブレイドとシールド、両者がぶつかり合い激しい火花が2機を彩る。

「どうした？ 身持ちが堅いぞ、ガンダム！ 今私は、阿修羅すら凌駕する存在だ！！ どれほどの性能差であろうと・・・矢は報いをせてもらつ。フラッグファイターの誇りにかけて」

「・・・てめえ、なんでガンダムを知つてやがる？ それに、フラッグファイターだと？」

「おそらく、貴様と同じ境遇だと言つておひう、アリー・アル・サーシエス！」

「なー!?」

剣と盾での凌ぎ合いを終え、2機の間にまた少しの距離が生まれた。

「まさかとは思つたが、よもや図星とはな・・・」

「てめえ、何て名前だ？」

2機はその僅かな間を空けたまま、腹の探し合いを続ける。

「・・・私はグラハム・エーカーだ。かつてフラッグファイターだった男だ。今もまたそ่งだが」

「グラハム・・・懐かしい名前だぜ、あの有名なコニオンのトップガンかよ。・・・はははははっ！ 道理でガキにしちゃあスゲエ動きする訳だ。面白くなつてきやがったなあ、最高だあ！！！」

「貴様も、私と同様に戦死して気付いたらしいにいたのか？ どうなんだ？ 詳しく聞かせてもらひうだ」

「わあてどうだうなあ？ 最近物忘れが酷いんでね、覚えてねえよ。どうしても知りたいんだつたら、俺を倒して拷問でもしてみなー！」

「・・・そうか、いいだう?」

2機の間合いが僅かに詰まる。数瞬の間にお互いの隙を狙つて見えない駆け引きが繰り広げられた。

そして、風が吹く。

「グラハム・エーカー、カスタムフラッグ行くぞ!—!」

決着への最後の火蓋が斬り落とされた。

## 天災（前書き）

更新が遅くなりすいませんでした。  
文化祭やら体育祭で浮かれてたんでも……言い訳ですね、はい。  
なんか謝つてばかりのようなん……それだけ、急げてたんですね自分、  
ごめんなさい。

さて、途中で会話文と地の文との間の行数が増えていますが、読みにくくこと指摘があつたからです。以後はこれで行くことにします。

アリーナの中央、中空に反転、急制動、急上下降と千变万化に疾走する影があった。鮮血と漆黒、二つの影は時に接近し衝突、火花を咲かす。そして離れ、また近づく。漆黒が一振りの剣を手に幾度も迫り、鮮血を斬りつけ、鮮血はそれを盾にて受ける。戦況は変わることを放棄し、同じ様な光景が繰り返されていた。幾度も幾度も。

「ははっ！ どうした、どうしたあ！！ そんな生つちろいので俺が倒せると思ってんのか？ ええ、ユニオンの元エースさんよお！」

一見、漆黒、カスタムフラッグが押しているかに見えるこの状況で、強者の余裕を湛えた声を上げたのは鮮血、アルケーガンダムであつた。先刻から防戦一方であるにもかかわらず焦りや危機感といった感情がサー・シェスにはまったく存在していない。

(くッ・・・強い！？ 機体の性能差もあるだろうが・・・この男、実力も私以上だと！？)

「・・・だが、それでも！！」

それとは正反対に、グラハムの内心は驚愕と焦燥。今までの幾重の必殺の斬撃、それが一つも実を結ばなかつた結果だ。だが今更どうしようもない、機体の性能差がある以上、彼は自身の持てる力を駆使し、その限界を超えて攻め続けるのみである。

フラッグがアルケーへと、もう幾度目かも分からない接近をする。

縦横斜めの斬り上げ、斬り下ろし、苛烈な突き、手を替え品を替え  
様々な組み合わせで両手のプラズマブレイドを振るい押し迫つた。

「だからあー！ 動きが、とれえんだよ。押し切られるわあやーねえだろおーー！ ちよこわーーーー！」

だが、その巧みな剣戟は今回も実を結ぶことはない。サー・シェスはアドバンテージの一つである機体の機動力を活かして斬撃を躱しそれが不可能なものはGNシールドで往なす。GNシールドを大きく振るい、ブレイドとかち当てた。その反動によりグラハムの右腕が大きく弾かれ一瞬、右脇腹が無防備となる。そこにサー・シェスは左足による鋭い蹴りを加えた。

「ちいっ、そう易々と当たりはしないぞ、ガンダム！」

逆にグラハムは右腕の反動を押し殺すことなく利用し、僅かに後退した。サー・シェスの左足が、擦れ擦れで掠める。

「残念だったな。あるんだよお、俺には取つて置きのこれがなあ

そして、カスタムフラッグのシールドが悲鳴を上げた。

「ぐううッ！・・・な、何だと!? これは・・・」

衝撃により更に後退させられたグラハムの目前には、阿修羅がいた。その左腕のGNシールドを開いてビーム刃を形成、盾ではなく剣となし、両脚部のGNビームサーベルをも起動させる。その脚部によりカスタムフラッグのシールドエネルギーは削られたのだ。その姿は、グラハムですら恐怖を感じた。

「たあて、サービスはここで終いだ。次からは、こっちも行かせて貰うぜえ！ 楽しませてくれるよなあ？ フラッグファイターさんよお！…」

まだ、驚愕により体勢を整えきれていないグラハムとの距離をサービスは無情にも一瞬で縮めた。振るわれる、腕、足。幾多の斬撃、先程までとは逆の状況。

「私が圧倒される！？ しかし、好きには…！」

グラハムもすぐさま体勢を立て直すことに成功し、同じく剣戟で迎え撃つ。一振りのプラズマブレードを、腕を回転させ振るい攻撃の相殺を計った。

スカーレットとライトブルー、2つの閃光が激突し周囲を彩る。だがそれも僅か、鍔迫り合いは許されない。手数で劣るグラハムはその腕を止めるることは出来なかつた。二度三度と切り結び、互いに振り抜かれる閃光。紙一重の綱渡りだが、以前戦闘は平行線、膠着を保っていた。

「やるじゃねえか。だがな！」

不意に異変は起こる。サービスは隙が出来ることも厭わずに力の限り大きく、GNシールドを振るつた。躲すことのできないように、脚部による攻撃をあえて避けさせて。赤い閃光がグラハムへと迫り、当然グラハムはこれを受けた。そして異変が起つた。

「ツ！ ブレイドの出力が負けている！？ やはりEVAでも駄目なのか？ これでは・・・くうツ！」

グラハムは右手に握られていたブレイドを脇へと抛る、それの数瞬後に小規模の爆発が起こつた。GNシールドのビーム刃に押し切られ、ブレイドはその柄を焼き斬られたのだった。

「無策ではこの様か、私は！　・・・それでも一矢は！！」

残された利き腕のブレイドで尚も果敢にグラハムは攻める。GNシールドを振るつた反動によるサーチェスの隙に乘じ、その身へと叩き込むが・・・

「なんと！？　これではビリモ・・・！」

「それで終えかよ？　ファング！」

繰り出されたブレイドは確かにサーチェスを捕らえ、そのシールドを削っていた。だが、そのブレイドが振り切られることはなくアルケーの身に、そのシールドに触れた瞬間に弾かれていた。削られたシールドは微々たる物すぎる、これでは何回グラハムが打ち込み続けても墜とすことは適わない。GN粒子、それに強化された装甲にシールド。それを突破するにはブレイドは貧弱すぎるのだった。

そして、その貧弱な、だが最後の希望は残されていたファングにより奪われる。ブレイドだけではなく、その身にもファングが突き刺さりフラッグは墜ちた。攻撃の反動で回避は出来なかつた。光は絶たれた。

「惜しかつたな、てめえ。もつ少し、ましな機体だつたらもつと楽しめてただろうつによお。屑みたいなそれでよく粘つたもんだ」

「貴様、それ以上私のフラッグを愚弄するな！　ただでは済まさん！！」

「へえ、そうかい。ISも失つたてめえに何ができるんだ?」

「くッ・・・だが、そんな道理、私の無理でこじ開けるだけだ!」

「そうかい。そりや、恐ろしいな。だつたら、殺しとかねえとな  
ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!

地に墜ち、ISを失つたグラハムに、サーシェスはGNシールド  
をゆつくり向けた。無論、ビームを展開して。

「最後まで虚勢を張つてられるように、サクッと殺つてやるよお  
! 有難く思ひな。じゃあ、お別れだあ!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!

GNシールドを大きく掲げて、その後、振り下ろす。目標はグラ  
ハム・エイカー、その頭部。ISを纏わない、纏えない今の彼では  
どうすることも出来ない。躲すことも、防ぐことも。そして、IS  
がないものがコレを受ければ・・・待つものは死のみだ。

「すまない、一夏・・・」

サーシェスの腕は振り下ろされた。そのビーム刃が容赦なくグラ  
ハムを斬り裂き蹂躪し、血飛沫が舞う・・・ことはない。

アルケーのGNシールド、そのビーム刃は何かをしつかりと捉え、  
その役目を果たしていた。だがグラハムは生きている。その命は存  
在し続いている。

「・・・まつたく、なにが『すまない、一夏・・・』、だ。そん  
な格好をつけている暇があつたら、もつと醜く、必死に足搔いてみ  
せろ、馬鹿者」

「て、てめえは・・・ツ！？」

その何か、何者かがグラハムへと語りかけた。それは彼がよく知り、またサー・シェスも知る人物だった。

「ブリュンヒルデに、そのお供がお出ましかよ。まだその時間じやねえ筈だろ？ 大将、しくじったのか？」

そう、かつてブリュンヒルデと呼ばれ、今もまたそう呼ばれる女性。ワルキューレの名を与えられた最強の人間。織斑千冬。今はその身にかつてと同じくEISを纏っていた。訓練用の打鉄だが、それでも相対する者に凄まじい威圧と気品を感じさせた。サーチェスも例外ではない。

サー・ショスの意識外からの瞬間加速。これにより彼女はグラハムへと凶刃が振り下ろされる直前に間に割り入り、それを受け止めていたのだつた。

「そつそつ、ちちの懇意に通りこませせんといひ」だ。随分とお楽しみだったな？」

「ああ、楽しませてもらつたぜ。久しぶりに、たつぱりと。」  
「つとあんたの弟さんのおかげでな」

「・・・どうする？ 引き続き堪能していくか？」もてなすぞ、心誠意、盛大にな」

サービスの挑発に、僅かばかり表情を陰らせ千冬は意趣返しと

ばかりに同じく挑発で返した。

（・・・何時の間にやら、ってやつだな。誰も此処には入れない手筈だつたから、油断しちまつたぜ）

（やつと、10人つてとか・・・これにブリュンヒルデが加わるとなると、笑えちまうな。どうせ、その10人も教職員の中では優秀な部類の奴らだろ）

（サシなら負けはしねえが・・・これだけを一度には、癪だが無理だわな。まあ今回は失敗だな・・・となると）

周囲の状況を確認し、挑発に応じることなくサー・ショスは冷静に、次への決断を下していく。

「・・・それは有りがてえとこだが、悪いが遠慮してくれ。あのブリュンヒルデと戦えるつてのは魅力的だが、次の機会を楽しみにさせてもらつとするよお！」

「では、どうするつもりだ？ 当たり前だが、逃亡などといつ選択肢は此処にはない」

「いいや、あるねえ！ てめえは無様に惨めに取り逃がすぞ、その機体ではなあ！ ファング！！」

アルケーの脚部、スネ部分のアーマーが展開されるのと同時に3

基のGNドライブが唸りを上げた。異常な量の赤い粒子が周囲に更に放出される。また腰部からは現在残されたファング全てが射出され千冬へと凶刃を向けた。

千冬はすぐさま、背後のグラハムを掴み離脱。続けざま、迫り来るファングを難なくと斬り伏せにかかった。

「小賢しいことを、最後の悪足掻きとでもいうのか？」

間合いで侵入したファングを全て叩き落とし、千冬はサーシェスを挑発する。常人なら、小型で機敏に動き回るそれを刀でどうにかするというのは狂氣としか感じられないだろう。だが、彼女はそれを成し遂げる。一分の狂いもなく機械の様に正確に振るう。それと共にプライベートチャンネルにより周囲の僚機へと攻撃準備の指示を送った。同じ教師である山田真耶がやりそうな、慌てて口に出すなんてことはしない。プライベートチャンネルは喋る必要はないのだ。

すぐさま、返事は返ってきた。ISの通信技術はどうやら、距離に関わらずGN粒子の影響下にはおかれないらしい。既存の技術と比べ、ISとはGNドライブ同様、特殊の塊と言つてもいいのかかもしれない。

「ああ、その通りだよ。別にコイツが通じるとは思ひ切やいねえぞ、なにせあのブリュンヒルデだ」

「だがなあ、一瞬でいいんだよお！！」

怒声、それに呼応してファングは暴れた。先刻までは意識を引き付けようとするかのように、周囲を飛び回つていがちだつたそれは、一斉に牙を剥ぐ。四方八方、全方位からファングは特攻をかけるのだった。

「ちい、面倒なこと・・・ツー？」

千冬はグラハムを庇いながらあるのにも関わらず、ファングを往なし、躲し、斬る。訓練用である筈の打鉄だが、その動きは第三世代の専用機と見紛わせる程だ。

だが、その卓越した技術に裏打ちされた、余裕の状況であるであろう千冬が見せたのは驚愕、焦り。

そして、その焦りと共に合図は出された。光が瞬いた。

(ちよつと遅えな。その距離からじや、どのみち当たらぬだらうがよ)

「じゃあ、また会うとしようぜ。ブリュンヒルデ、織斑一夏、それにフラッグファイターさんよ」

アルケーの周囲、アリーナの観客席各所から閃光が煌いた。その数は10。実弾、ミサイル、レーザーとその内容は様々だ。だが共通することは一つ、全てはアルケーへと降り注ぐ。

・・・いや、正確には、アルケーが居た空間か。それらは、そこを通過し地面へと降り注いだのだった。

その、ほんの少し前、サーショスは発動していた。一夏や千冬と

同じく、ISでしか出来ない、アレを。

『瞬間加速』、ISを身に纏い、その技能があれば誰でも行えるもの。エネルギーを大量に消費し異常な加速を行うだけのもの。そして、そのエネルギーが多大なほど、それは増す。

『GNドライブ』、重粒子を質量崩壊させることによりエネルギーを取り出す。それは今の人類にとって未知のエネルギーにほかなりない。そのエネルギーは莫大、原子力さえも凌駕しかねる。

この二つの特殊が掛け合わされた。GNドライブ、その莫大な熱量、GN粒子による重力軽減、それを振り代とした瞬間加速。それは光に迫るほど・・・

まばたきの内に、アルケーは視界から消えうせた。GN粒子でレーダーは利かない、追うすべはない。

嵐は、身勝手に、唐突に去った。ただそれだけ、多くの傷跡を残しただけ、天災のように。

## 天災（後書き）

読了お疲れ様です。ありがとうございました。

我ながらに表現がくどいし、厨二くさいですね。  
だが、安心してくれ。次回からは会話文だけにもどるぞ！ ではノシ

## 嵐の後に

〈HIS学園、保健室〉

一夏 「うッ・・・・・?」

一夏 「此處は・・・?」

一夏 （ええと、どうなつたんだ？ 僕の攻撃が失敗して、グラハムに助けられて、それから――！）

千冬 「気がついたか」 シヤツ

一夏 「ち、千冬姉！ ぐ、グラハムはどうなつたんだ？ あの工Sは？ 倒せたの ツ！」

千冬 「落ち着け。体に致命的な損傷はないが、全身に酷い打撲がある。暫くは地獄になるだろうから覚悟しておけ」

一夏 「そ、それよりグラハムは？ 篠は？ 鈴は？」

千冬 「安心しろ。全員、お前よりは軽症、ピソピソしている筈だ」

一夏 「そ、そうか。はあ・・・」

千冬 「少なくとも体はな・・・」 ボソツ

一夏 「え？ そ？」

千冬 「衝撃砲の最大出力を背中から受けたんだぞ、お前は。しかも、ISの絶対防御をカットしたな？」

千冬 「拳句の果てには、ISが強制解除されるまで殴られて、よく死ななかつたものだ。人の心配をする前にその体の心配をしろ」

一夏 「う・・・」

千冬 「まあ、何にせよ無事でよかつた。家族に目の前で死なれるなんて悪い冗談が過ぎるからな」

一夏 「千冬姉」

千冬 「うん？ なんだ？」

一夏 「いや、その・・・心配かけて、『めん』

千冬 「フフッ、心配などしていなーさ。お前はそう簡単には死れない。なにせ、私の弟だからな」

千冬 「では、私は後片付けがあるので仕事に戻る。お前も、少し休んだら部屋に戻つていいぞ」 ロツロツ、ガチャ

ガチャヤ、コツコツ

第 一夏 「あー、ゴホンゴホン！」 ジヤッ

一夏 「・・・よつ第」

第三 「う、うむ」

第三 「あ、あのだなつ。今日の戦いだがつ」

一夏 「ん？ そ、そういうばアソツはどうなつたんだ？ あの赤いIS、倒せたのか？」

第三 「い、いや、グラハムも奮闘したが駄目だつた……。その後に先生方も突入したが、決着したと思つた矢先に逃げられた」

一夏 「そうか……一体何者だつたんだ？ あの野郎は」

第三 「わからない。相手の素性、所属共に不明だと千冬さんは言つていた。だが目的は、はつきりしている。一夏、お前だぞ」

一夏 「ああ、わかつてゐる。だけど何で俺なんかを？」

第三 「何を分かりきつたことを言つてゐるんだ？ 世界でほほ唯一、男でISが動かせる。これだけで、目標とするには充分な理由だらう」

第三 「その特別である一夏を調べれば、自分達も特別になれるところ中が居てもおかしくない。いや、五万といふだろうな。こういうことが予想されることがあるから、IS学園に無理にでも入学させられたんだぞ？」

一夏 「そ、ういえば黒服の人達も、君を保護だとか、どうとか言ってたな、確か」

「やつこいつ」ことだ。お前は自分の価値を認識しなおせー。」

「まあ、それでも今回は異常すぎる。いくらなんでも学園に直接乗り込んでくるなんて……」

一夏 「え？ どうしてだ？」

「IIS学園といえば表面上はただの教育機関だが、世界中でこの軍施設や研究所よりもIISが集まっている場所だぞ？ 警備のレベルや、有事の時の防衛システムなんかも実は桁違いだ。そこには侵入するなんて、普通は考えない。実行するなんて専門だ」

一夏 「でも、今回はあんなに簡単に」

「それだけ、相手が異常だったんだ。要塞レベルの此処に侵入し、慣れ、難なく去つてこくぼどに・・・」

「だ、だからこそ、お前は何を考えているんだ！」

一夏 「へっ？」

「無事だったからいいようなものの・・・あのよつた事故、先生方に任せておけばいいだろ？！ 過剰な自信は身を滅ぼすといつ言葉を知らんのか！？」

一夏 「も、もしかして心配してくれたのか？」

「し、していない！ 誰がお前の心配などするものか！」

「とにかくだ！ 今後こんな事態があつた時の為に、訓

練はこれからも続けていくぞ！ いいな？」

一夏 「あ、ああ、わかつたよ」

第 「わかれればいい。 . . では、私は先に部屋に戻るぞ」

第 「. . . 。一夏」

一夏 「ん？」

第 「その、だな。戦っているお前は・・か、かか、かつ」

第 「格好良かつたぞ」ボソ

一夏 「は？」

第 「ツ！ な、何でもない」

第 「で、ではな！」ガチャ

一夏 「ふう・・・ん・・・、急に眠気が」

◀HS学園、グラハムの部屋▶

千冬 「グラハム、話がある入るぞ」コンコン、ガチャ

グラ 「なにか用か？ 千冬女史。正直、今は一人にしてくれると有難いのだがな」

千冬 「はあ、何を落ちしているんだ？　お前は」

グラ 「別に落としてはない。ただ、自分自身について考えていただけだ。フラッグの、自身の矜持とプライドを守れなかつた自分を」

千冬 「・・・それを、落ちしてくると痛つんだ」

千冬 「まあ、いい。それよりもグラハム、お前には私に付いてきて貰うぞ」

グラ 「む？　構わないが、何処へ？」

千冬 「秘密だ、着いてからのお楽しみとでもしておくかな」

グラ 「？」

千冬 「余計なことは気にせず付いてくればいい。行くぞ」

グラ 「あ、ああ」

\* \* \* \* \*

↙HIS学園、地下 ↘

千冬 「着いたな。グラハム、田舎を取つてもいいぞ」

グラ 「ん・・・しかし、随分な警戒だな。わざわざ、こんな物を使うなんて」

千冬 「それだけ、」の学園には裏があるということだ」

グラ 「此処は何だ？ 研究所といった言葉がピタリと当たはまり  
そうなのだが」

千冬 「さあな、お前の想像に任せると、長いのは好みじゃない。  
単刀直入でこう」ピッ！

<<どうした？ 身持ちが堅いぞ、ガンダム！>>

<<・・・・てめえ、なんでガンダムを知つてやがる？>>

<<おそらく、貴様と同じ境遇だとおこり、アリ  
ー・アル・サーチュス！>>

<< グラハム・・・懐かしい名前だぜ、あの有名なユニ  
オンの >>

<< 貴様も、私と同様に戦死して氣付いたうひうひう  
たのか？ >>

グラ 「これは・・・」

千冬 「聞いて分かる通りに、先の戦闘での、お前と侵入者との会  
話の記録だ」

千冬 「言いたいことは分かつていいるな？」

グラ 「・・・ああ」

グラ 「拘束でも、尋問でも好きにしてくれて構わない。無論、知つてることを全て話し、抵抗もしない。だが、言葉では信用できないだろ？から、そうしてくれ」

千冬 「・・・ハア、分かつていいでないですか」

千冬 「お前には勿論、あの侵入者、アリー・アル・サーシェスとやらについて答えてもらつ。だが、拘束も尋問もなしだ」

グラ 「いいのか？ 私は一応は素性が知れない人物なんだぞ？」

千冬 「甘く見ないで貰おうか？ これまでの時間があれば、お前が信用に足るか、足らないかなど、容易に判断できる」

千冬 「そして私はキナ臭い奴を視界においておくほど、能天氣ではないと自負しているんだがな」

グラ 「・・・感謝する」

千冬 「フツ、馬鹿者・・・ああ、だがその前に一つ見せたい物があつたな」ピツ、ブシュウ！

千冬 「・・・これだ」

グラ 「！」、これは！？」

千冬 「これが何か、説明は必要か？」

グラ 「これは… サイズはIS並みだが… 間違いない『GN  
ドライブ』…？」

千冬 「やはり要らないみたいだな

グラ 「な、何故これが此処に？ お、教えてくれ…」

千冬 「落ち着け。それはだな

束 「ハイ、ハイ！ それは私が説明するよん…」 プシュー

グラ 「ぬお…？」

千冬 「束、いきなり出てくるな

グラ 「…束？ …ツ！？ 束といつひとば、もしやIS  
の開発者、篠ノ野 束博士か？」

束 「そう、私が天才の束さんなのだよ。はうー

グラ 「は、ハローー」

束 「おお、やつぱり発音いいね！ さすが外人さん

グラ 「はあ」

グラ （カタギリ以上の変わり者だな… 私も大概だが、やり辛

(い)

束 「君が噂の2人目の男性ＩＳ搭乗者だね。ふふー、話を聞く限りかなり興味深いよね、君は。よし、覚えたよ！」

千冬 （束が他人に興味を示すなんて、珍しいな・・・）

グラ 「あ、ありがとうございます」

グラ 「で、そろそろ、Ｕの『GNZドライブ』について説明して頂きたいのですが？」

束 「ああ、それ？ それは、ちーちゃんからのデータを基に私が開発したものだよ。そんだけ～」

グラ 「か、開発！？」

束 「そ」

グラ 「で、データといつのは？」

束 「Ｕの間の戦闘のデータとか、あのＩＳが残していくた遺留物のデータとかだよ～」

グラ 「・・・」

グラ （開発と言つたって、まだ3日も経つていないぞ！ それに、その程度のデータで？）

グラ （篠ノ野 束、ＩＳ開発者は伊達ではない！ ということか・

・・

千冬 「まあ、信じられないだろうが、そういうことだ。グラハム、  
HSを出せ

束 (まあ、本当のところは、あの時にクラッキング元からデータ  
を盗んだおかげなんだけどね~。ぬう~、まだまだ興味深いデータ  
がたくさんあつたのにこれしか抜けなかつたよ。プロテクト硬す  
ぎ~、私が手こびするなんてね)

グラ 「了解したが、何故?」

千冬 「勿論、これを取り付けるために決まつているだらう」

グラ 「い、いいのか!？」

千冬 「これを知り、使うに相応しいのはお前しかいないと私が判  
断した」

千冬 「お前には、HSの間の借りを返してもらわないといけない  
だ。一夏の分もな」

千冬 「この期待、無碍にしてくれるなよ?」

グラ 「・・・の、「望むとひだ」と言わせておひつーーー」

千冬 「よし。束、頼むぞ

束 「しおうがないこやあ。どれどれ? HSをこびこび、ああ  
して、うづゅ~」



## 嵐の後に（後書き）

はい、大分無理矢理ですがカスタムフラッグからカスタムフラッグ？、またの名をGNフラッグへとパワーアップすることになります。

ただ、原作の設定通りにサーベルだけで行くか、ロボット魂みたいにライフルを着けるかで悩んでます。

更新が相変わらず遅いですがご了承ください、ではノシ

## アニメじゃない

「アリーナ」

ガ「ゴッガン！」 キュイイイー——ン——！

グラ 「はああああああ——」 バシュウ、ブウン——。

グラ 「（この）ペーキーな操作性、身を刺すよつなG。変わりないな、あの時と。何の因果か・・・おもしろいこ）

グラ （だが、全てとこいつ訳ではないか。この粒子の色、タ焼けのよつな鮮やかなこれは・・・）

千冬 くく機体の調子はどうだ？ グラハム。GNZドライブは良好か？ へへ

グラ 「なかなかのじゅじゅ馬だが、問題はない。GNZドライブも今のところは高水準の出力で安定しているぞ」

千冬 くくまあ、突貫での取り付けだったからな、機体に歪みが出るのは仕方のないことなんだ。そこは技量でなんとかしちゃへへ

グラ 「了解した、元よつそのつもりだ」

千冬 くくフツ、そうか。さて、必要はないかもしかんが一応、機体の改修点について説明しておへぞへへ

グラ 「頼む」

千冬 くくまづ大きな改修点は一つだ、もちろんGNドライブを搭載したことになる。それにより、出力、運用可能時間、機動・運動性等が飛躍的に向上した。特に機動性は変形時のフラッグをも凌駕する程だゝゝ

千冬 くくが、それに伴い搭乗者への負担も増加した。以後注意しろ。また、無理な設置のため変形機構は省略されているからなゝゝ  
千冬 くく次に武装だが、ドライブ搭載による拡張領域の消費により固定武装のバルカンとビームサーベルのみとなる。なに、以前にライフルは不要だと言っていたから問題はないだろう?ゝゝ

グラ 「もちろんだ。最高の剣があれば、それで充分。何であろうと斬り捨ててみせる」

千冬 くくよし。後は細かい変更点が幾つかだ。センサー類の強化に、両脚部にスラスター兼兆弾を誘発せることにより被害を軽減するデイフーンスロッドを搭載した。また背部にあつた翼は撤去されているゝゝ

千冬 くくとまあ、ぞうとこんなところだな。グラハム、なにか質問はあるか?ゝゝ

グラ 「東博士は、そこだ?」

千冬 くくああ、居るぞゝゝ

グラ 「では、代わつてもらえないだろ？」「

千冬 << わかった。少し待て >>

束 << · · · ハイハイ！ 束さんに何の用かな？ >>

グラ 「GNドライブについてなのですが···」この粒子には毒性があるのでは？」

束 << · · · よく知ってるねえ、やっぱり面白いやつよ、君 >>

グラ 「やはり毒性があるのですか？ この色でも」

束 << ううん、大丈夫だよ。あの侵入者が残していったそれは確かに細胞に異常を発生させる性質があつたけれど、私のはちゃんと対策済みだからね >>

グラ 「そうですか。それなら安心して使えます」

束 << うん、じゃあ頑張って使いこなしてよ。データの方も期待しているからさ >>

束 << ジャあ、お話を終い！ バイバイ >>

グラ （ふう、よかつた。最大の懸念はなくなつたか··· 戦争でなら気にせず使えたが、今の状況ではな）

グラ （今私は破壊だけでなく、守らなくてはならない、自分以外も···一番、あの時と違うのはこれなのかもな）

千冬 「・・・やはり俄かには信じがたい話だな」

束 「うんうん、荒唐無稽もいいところだよね！ 面白いなあ」

グラ 「うつ・・・確かに未だに自分も信じられない気持ちはあるのだが、事実としか・・・」

千冬 「そุดだな嘘みたいな話だが、あの侵入者に、GNドライブ、これらがあつては信じるしかないか」

束 「まあ、そุดよね。じゃあ、その話を纏めてみると・・・」

束 「グラハム・エーカーは今よりも300年以上未来の世界の軍人で、その世界にはMSという巨大な人型機動兵器がある。そして君はそのエースパイロットだった」

束 「また、その世界では軌道エレベーターによる太陽光発電で資源問題が一応には解決しているものの歪みを大量に抱え込んでおり、今と変わらず戦争は絶えなかつたと」

束 「そんな時に現れたのが、GNドライブという未知のテクノロジーを搭載したMS、『ガンダム』を保有する私設武装組織『ソレスタークビーリング』」

束 「彼等の理想は戦争の根絶で、その為の武力介入を開始。圧倒的性能をもつた『ガンダム』はそれを実行でき、それに対抗する

ために結果的に世界は纏まり、変わつていつた。君も、軍人として、個人的思想も交えて『ガンダム』と対立し、戦い、変わつていつた

束 「地球連邦の樹立、独立治安維持部隊『アロウズ』の発足、暴走。その非人道的行為を止めるためにも『ガンダム』は介入。『アロウズ』を裏で牛耳るイノベイターとの戦いに発展していつたんだね」

束 「結果はイノベイターの敗北、『アロウズ』は解体され、新たな地球連邦政府が発足して世界は緩やかだけど確實にいい方向へと変わつていつた・・・筈だつたんだけど」

束 「イノベイターとの戦いの僅か数年後に、未知の地球外変異性金属体『E-L-S』が飛来、地球連邦の全戦力と『ソレスタルビーイング』をも参加する、まさしく人類の存亡を賭けた戦争が繰り広げられてしまつた。もちろん君も参加し、奮闘するも戦死をしてしまい、この戦争の結果は不明と」

束 「で、気付いたらこの時代のI.S学園に倒れていたんだね。しかも、若返つて」

千冬 「・・・あ、改めて纏めてみると本当にアニメの世界だな」

グラ 「・・・だが、私の中では事実なんだ。この先、この世界で起こるとは限らないが」

束 「うーん、こんだけぶつ飛んだ世界になるとは思えないし、どこか別の平行世界の未来かもねえ。で、君はそこの住人つてわけだ!」

束 「常識的に考えたらありえないよね。平行世界の存在自体がフィクションでしか考えられてないし、ましてやそこから移動していくなんて」

束 「ん？・・・もしかしたら、アレかもしねえ。輪廻転生の類とか。物質的に移動したんじゃなくて、記憶的、精神的に別の肉体に宿つたのかも」

束 「いや～、好奇心がこれでもかつてくらい操られるよね！ぜひ調べなくちゃー！」

千冬 「まあ、そこいらへんは頼むぞ。束」

グラ 「束博士。私からも、お願いしたい」

束 「オッケー、意地でも解明してみせるよん！」

千冬 「で、それに関連してだがグラハム、お前は何を望む？」

グラ 「む？ 望むとは？」

千冬 「戻りたいと思っているんじゃないのか？ 元の世界に。その方法を模索したりはしないのか？」

グラ 「・・・確かに、未練はある」

グラ 「当初は自分もE.S学園で過ごしながら、何故此処に来たのか、どうすれば帰れるのかを考えようと思つた」

グラ 「だが、もし帰れたらと仮定すると・・・私は戦死した身だ。

死者が蘇るなど、許されないだろう。そういう意味で私の居場所は、あそこには既にない」

グラ 「それに、私はあの世界と離別する決意を持って戦死したのだ。いまさら、僅かな未練で帰ろうとは思わなくなつたわ」

グラ 「まあ、何故此処に来たのか？『E-L-S』との戦いがどう決着したのがだけは是非にも知りたいところだがな」

千冬 「そうか。いいんだな？」

グラ 「ああ。何の因果かこうして此処に居られる以上、私は此処でこれからを生きていいくつもりだ。・・・神からの余生の贈り物と考えてね」

千冬 「わかった。お前が決めたのなら何も言ひつけはない」

グラ 「心遣い感謝する」

千冬 「別に当たり前の」とだ。わざわざ、礼を言つた

千冬 「・・・といひで、お前の話からすると実質的な年齢は、もしかして私よりも上になるのか？」

グラ 「もちろん。千冬女史の詳しい年齢は知らないが、せいぜい20代前半だろう？ 私が最後の戦いに参加した時は34だからな。今も実質的には34になるか」

千冬 「・・・そ、そうか」

千冬 「あ～ゴホン。じゃあ次は、あの侵入者、アリー・アル・サーシュスについて聞かさせてくれ」

グラ 「・・・すまないが私も面識がある訳ではないんだ」

グラ 「だから詳しい素性や経歴も知らない」

千冬 「分かった。なら、まず始めに一応聞いておくが、奴は男だよな？」

グラ 「ああ、勿論そうだが？」

千冬 「なら何故IISを？」

グラ 「そ、それは・・・そういうえば何故だ？」

千冬 「いや、聞き返されてもな。束！」

束 「うーん、調べてないから唯の予想になるけど、向こうから来た人は男でもIISが使えるのかも知れないね。遺伝子の構造とかがこっちの人間とは少し違うのかも」

グラ 「それが、私が若返ったのと似たように、性別が逆転したかだろ？ 想像したくもないが」

千冬 「なるほどな。それで他には？」

グラ 「他に知っていることといえば、イノベイターの直属で『ソレスター・ルビーリング』と戦った傭兵だとこいつことぐりいになる」

グラ 「そして、彼はイノベイターとの最終決戦時に、ガンダムと交戦、戦死した筈なのだ」

グラ 「恐らく、私と同様にしてだろうが……一つ気掛かりがある」

千冬 「何だ？」

グラ 「……あの紅いIS、それがかつて彼が乗っていたMSに酷似しているんだ。外見上では同一と言つていいくほどに」

グラ 「そして性能も同じかそれ以上だと思う。GNドライブに、ファング、どれもこちらにはない筈の物がサイズは違えどそのまま搭載されている」

千冬 「何が言いたい？」

グラ 「なぜ奴がガンダムを、GNドライブを搭載したISを有しているのか？ それが不思議でならない」

グラ 「同一のカラーリングや、面影がある程度なら不思議ではないんだ。外見がまったく同じなのも百歩譲つていいとしよう。それは、こちらのISをサーシェスが改造すれば説明がつく」

グラ 「だが性能は……GNドライブやファングは、そうはいかない。あんなもの、いくらMSの、元の世界の知識や記憶があつても1人では勿論、もし、こちらの技術者と手を組めたとしても作れるものじゃない」

グラ 「それに傭兵が、そんな知識を持つているとも考えられない。

G Nドライブは、私達の世界でも勿論機密事項だ。まさか束博士の  
ように独自に開発したなんて「冗談はないだろ?」

束 「そりだね、それはありえないよ。実は私も開発したとか  
言いつつ設計図通りに組み立てただけみたいなもんだしね!」

グ・チ「・・・は?」

束 「ん?」

千冬 「・・・束、ビうじう」とだ?」

束 「いやー、『開発した!』なんて格好付けたけど実は根本の  
重要なデータは殆ど他所からぶっこ抜いて来たんだよね。見栄は張  
るもんじゃないね、恥ずかしくなつてきたよ!」

グラ 「ビ、ビにからー!?」

束 「ほら! あの襲撃の時さ、このシステムが乗っ取られた  
でしょ? 相手が此処に意識を向けてる間に逆に侵入してやつたん  
だよ!」

束 「それが予想以上のセキュリティの硬さでさ、流石の束さん  
でもG Nドライブ(これ)のデータしか持ち出せなかつたよ。まあ、  
相手がその守りに驕つてたおかげで発見されるのには余裕があつた  
んだけどね」

束 「でも、惜しいことしたなあ。G Nドライブ(これ)以外に  
も色々と面白そうなデータがあつたし、これに関連したのでも『ツ  
インドライブ』とか『トランザムシステム』とかいかにもなのがあ

つたのになあ。タイトルぐらいしか見れなかつた」ハア

千冬 「・・・束、何故リアルタイムでそんなことを知つていたんだ?」

束 「へー? ・・・いや~突然キューピン!と来たんだよ?」「(お伊の弟さんを、あのヒトよりしく襲撃しようと様子を伺つてたなんて言えな)よ・・・殺されるね、ガチで)

千冬 「ハア、なんで疑問系なんだ・・・まあいい。で、お前の言つてる」とは本当なんだな?」

束 「うん、もちろんだよ、ちーちゃん! 黙つて『ゴメンね?』

千冬 「まあ今回は許してやる。そのかわり、次はないからな? ・・おい、グラハム」

グラ 「・・・ハツ!」

グラ 「・・・すまない呆けていた。それで?」

千冬 「聞き覚えはあるか? 」Jの『ツインドライブ』と『トランザムシステム』とやらば?」「

グラ (『ツインドライブ』・・・少年のあの一個付きのことか?『トランザムシステム』は言わずもがなだな)

グラ 「ああ。じつうとも回りに回った技術だと思ひ」

グラ 「しかし、Jの『トータ』や他の兵器の『トータ』まであつたとなる

と・・・

千冬 「確定だな。奴には、奴以上に向ひうの知識をもつた協力者が居る」

グラ 「察しがよくて助かる」

千冬 「だが、だとすると誰だ？ 心当たりのある人物を知っているか？」

グラ 「確証はないが、おそらくイノベイターの内の誰かだらう」

千冬 「イノベイターといふと、サーシェスの雇い主になるか？」

グラ 「そうだ。『ツインドライブ』や『トランザム』の情報は当時、奴らか『ソレスタークリーニング』ぐらいしか知らなかつた」

グラ 「そして奴との関係が深いのはイノベイターだ。協力しても不思議はない」

千冬 「そつか。だが、そだとして何故だ？」

グラ 「む？」

千冬 「なぜ奴らは襲撃を、一夏を狙つたんだ？」

グラ 「・・・分からぬ」

グラ 「なにか独自の目的があるのか・・・、単純に男でエスを操れる一夏に興味があるのか」

千冬 「そうか。まあ、なんにしても今は警戒する以外にできる」とはないか」「

グラ 「歯痒いが、そうだな……」

束 「そだねえ、侵入したとはいえ居場所までは分からなかつたしねえ」

グ千束「…………」

千冬 「……ハア、仕方のないことをおれこれ考えても意味がない、切り替えるぞ！」

グラ 「ああ、その通りだな」

千冬 「という訳で、お前の部屋はこれから一夏と同室になるからな」

グラ 「な、何！？」

千冬 「次の襲撃に備えてだ、我慢してくれ。お前には悪いが、もしもの時は一夏達を頼むぞ」

グラ 「ああ、なんだそんなことな……『達』？」

千冬 「おっと、これも言い忘れていたな。今度からはお前は3人部屋になる。転校してきた者が居るんだ。しかも」

千冬 「男のな」



## アニメじゃない（後書き）

テストや、修学旅行やらでバタバタしていて投稿ができなくてすいませんでした。

でも次回でよひやくお待ちかねのあのキャラたちを登場させられそうですよー。

次回は田羅日になります。では、ノシ

爆発しないかなあ

△時間は少々遡り、保健室へ

「…………」

一夏（・・・ん？ 人の気配？ また俺眠つてたのか・・・）

鈴 「一夏・・・」

一夏（ん、頬がこそばゆいな。誰だ？）

一夏 「んう、つて鈴？」

鈴 「つー?」

一夏 「なにしてんの、お前。そんな顔近づけて、あと3センチぐらいで鼻ぶつかるぞ」

鈴 「おっ、お、おお、起きたのー？」

一夏 「お前の声で起きたんだよ。で、どうした？ 何をそんなに焦つてるんだ？」

鈴 「あ、焦つてるわけないじゃない！ 勝手なこと言わないでよ馬鹿ー！」

一夏 (エリハ)見ても焦つてゐる。本当にありがとうござつた)

一夏 「あー、やつこえは試合、無効だつてな」

鈴 「え? ああ、まあ、やつややつじゅうな・・・

一夏 「あー」

鈴 「な、なこ?」

一夏 「勝負の結果ついてある? 次の再試合つて決まってないんだよな?」

鈴 「その」となり、別にちつこいわよ

一夏 「え? なんで?」

鈴 「い、いいからいいのよー」

一夏 「鈴」

鈴 「なこよ」

一夏 「・・・その、なんだ、わ、悪かつたよ。色々と、すまん」

鈴 「ま、まあ、あたしもムキになつてたし・・・。こわよ、もつ

一夏 「あー、思ひ出した」

一夏 「あの約束つて、正確には『料理が上達したら、毎日あたしの酢豚を食べてくれる』だつたよな。で、どうよ、上達したか？」

鈴 「え、あ、うう……」

一夏 「なあ、ふと思つたんだが、その約束つて違う意味なのか？俺はてつきり飯を齧つてくれるんだばかり思つていたけど」

鈴 「ち、違わない！ 違わないわよ！？ だ、誰かに食べてもらつたら料理つて上達するじゃない！？ だから、そうだから！」

一夏 「だよな～。いや、もしかしたら『毎日味噌汁を～』の例のアレかと思つたけどや。そんな訳ないよな。恥ずかしい勘違いしちゃたな」「

鈴 「…………」

一夏 「鈴？」

鈴 「へえっ！？ そ、そうよ！ 私がそんな恥ずかしいこと言うわけないじゃない！？ あは、あははははは・・・は「

一夏 「なあ、鈴」

鈴 「ん、なに？」

一夏 「今度、どうか遊びに行かないか？ 勝負とか関係なくそ」

鈴 「えー？ それって、そのティー

一夏 「五反田も誘つて、中学の時みたいに3人で。あのころみ  
たいに謔いひつけ」

鈴 「・・・・・」

鈴 「・・・・行かない」

一夏 「そ、そつか

鈴 「で、でも・・・あ、あんたと2人つきりつていうなら行つ  
てあげても」

一夏 「ん? 五反田のこと実は苦手だったのか?」

鈴 「さうじゃないけど・・・」

一夏 「まあ、さうだな。勝負の時も2人でつて話だし、そつ  
するか」

鈴 「ほ、本当?」

一夏 「ああ」

鈴 「言つたわね! よし、怪我が治つたら空いてる日教えなさ  
いよ。予定立てとくから。約束だからね!」

一夏 「わかったよ

鈴 「じゃ、じゃあ、もう行くことにするわ。じつかりと休みな

さこよ！「ダツ！」

鈴（やつた、やつたわよ、グラハムー）「これでやつと一夏と、デ、デー、デートが・・・」

一夏「まったく、騒がしいな相変わらず。ま、おかげでこっちまで気分が晴れたけどわ」

この数日後、俺は無事体調が快方に向かい退院できた。そして部屋に戻るなり、箸と喧嘩したり、チャーハン食ったり、部屋が別になるとことになつたりだの普段通り、いやそれ以上の騒がしさに包まれた。拳句の果てには、来月の学年別個人トーナメントに箸が優勝できたら付き合えと言つて来るではないか。もう、何が何やら分からぬが、そんな感じで宣戦布告された俺だったのだ。

part 2 end

## 高まる期待

△△△学園一夏自室前△△△

一夏 「あー……手がダルイ、たくっ弾の奴、ムキになりやがって」  
ガチャ

グラ 「ん？ おお、帰ってきたな、一夏。」こんな時間まで、ビリ  
してたんだ？」

一夏 「ただいま。弾の奴とゲーセン行つてさ、そこで延々ホッケ  
一対決。今日で俺の連勝数は十六まで伸びたよ」

一夏 （）といふか弾の奴、あれだけやって全敗、しかもぼぼ自殺点  
つてどうなんだ……）

グラ 「弾？」

一夏 「ああ、俺の中学校の友達でさ、五反田 弾つていう奴がいる  
んだよ。そりだ！ 今度グラハムも一緒にゲーセン行こうぜ？ そ

の時に弾も紹介するからさ」

グラ 「それはいいな。楽しみにわせてもいいつかるかな」

一夏 「おひー。」

一夏 「といふやあ、もうすぐになつてしまつたよな、アレ。今月  
だぜ?」

グラ 「アレ?」

一夏 「わつアレだよー。学年別個人トーナメント。忘れてないよ  
な?」

グラ 「ああ、そのことが。忘れるはずがないだらうー。今もまた、  
その日を恋焦がれている私が!ー」

一夏 「やつはひとつ思つたぜ、……負けないからな、グラハム」

グラ 「いい心意氣だ。『望むところだ』と言わせてもらひついー。」

一・グ 「…………」

一夏 「…………と、やれにしても、やつぱついし、廻部屋のじこみひせ、云々がなーか  
？」

一夏 「纂が別の部屋に移動したと呟いたら俺も移動。グラハムと一緒になったのは良かつたけどさ、氣使わないですむし。でも前の部屋でよかつたんじや…………。ベジ「なんか3つもあるぜ?」

グラ 「ああ、すぐに慣れるぞ。…………それどじいのか窮屈に感じるのは  
かもな」

一夏 「?」

グラ (十冬の言つていた転校生…………か、しかも男の……)

「ン」

鈴 「一夏、西野?」

セシ 「グラハムさん、いらっしゃって?」

一夏 「おう。どうした? 2人とも」ガチャ

グラ (... 一体どんな人物なのか、気になつて仕方がないな...)

鈴 「いや、夕食一緒にどうかな~と思つてさ。ね、セシリア?」

セシ 「そ、そうですわ。お一人とも夕食はまだでしょう? なら是非私達と...」

一夏 「おお、丁度いいな。俺もそろそろ飯にしようかと思つてたんだ」

グラ (... 明日にも到着するとの話だったか。よもや私と同じ、なんてことは...)

鈴 「なら決まりね! もあ早くいくわよ」

セシ 「ちょっと鈴さんー まだグラハムさんが

一夏 「そうだぞ、鈴、落ち着け。ああ、でもグラハムはもう食つちまつたかな」

グラ（それはないとしても、私を抜いて世界で2人目の男性IS操縦者が……そして、僕偉にもトーナ（

一夏「お~い、グラハム！」

グラ「む？ なんだ？」 クルツ

一夏「鈴とセシリアが夕飯食あうだつて。俺は行くつもりだけど  
ビーツするっ！」

グラ「ああ、私もまだだつたな。同行させてもらあう」 スクッ

一夏「よし。じゃあ行ー！」

セシ「早く行きましち、グラハムさん！」 グイッ

グラ「セ、セシリ亞そんに引つ張るな

セシ「へへ」

グラ（フツ、まつたく。…………それにしても、間近に迫ったトーナメント。これ程ああつらえ向きの舞台もないぞ。世界で2人目の男）

グラ（その実力とやらを、存分に見せ、感じさせてもらいたいものだ……）

転校生はプロンド貴公子

＜HHS学園1年1組＞

真耶 「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！ しか  
も一々名前です！」

「え……」

「 「 「えええええつーー？」」

一夏 （凄い驚き様だな皆、まあ俺もだけど。というか、なんでう  
ちのクラス？ 普通、分散させるもんじゃないのか？）

グラ （ほう、転校生は2人も居たのか。面白い……）

転1 「失礼します」 ガラッ

転2 「…………」

「転1 シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いと思いますが、皆さんよろしくお願ひします」

「お、男……？」

「もふ……」

一夏（く、来るぞ……！）

シャル「はい？」

「……」ツーッ

「…………フツ、私の負けだな。」、鼓膜が耐え切れんとは

シャル「.....」

一夏 「一体何処から口論をを出してるんだ・・・。というより平氣なのかよ!? アレか、自分の毒で死ぬフグはいないうことか?」

ク女 「男子! 前代未聞の3人目の中子!」

ク女2 「しかもひみつのクラス! こんなに嬉しいことはない!.....」

ク女3 「美形! 守つて欲しい織斑君やグラハム君とは違つてあげたい系!」

ク女4 「ゴーバアアアアアス!」

千冬 「あー、騒ぐな。静かにしろ」

真耶 「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わつてしませんから」

転2 「.....」

グラ（ふむ……、なかなかどうして……）

千冬「……挨拶をし、ラウラ」

ラウラ「はい、教官」

千冬「……ではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、……ではお前も唯の一生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

ラウラ「了解しました」

ラウラ「……ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「…………」

真耶「……あ、あの、以上……ですか？」

ラウラ「以じょ……」

一夏（ん?）

「ウラ 「貴様が……！」

パシィンッ！

グラ 「なんどーー？」

「ウラ 「…………」

一夏 「…………へ？」

「ウラ 「……私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか！」

一夏 「い、いきなり何しゃがる！ー！」

「ウラ 「ふん……」 スタスタ

グラ （一体、一夏と彼女に何があつたとこつのだ？ あの凍てついた目は……）

千冬 「あー、……ゴホンゴホン！ ではHRを終わる。各人はすぐ着替えて第二グラウンドに集合。今日は2組と合同でTIS模擬戦闘を行う。解散！」

一夏 「つたく、何なんだよあの野郎！ ……野郎じゃないか。クソ、腹立つけど今は出て行かないと」

千冬 「おい、織斑、グラハム。デュノアの面倒を見てやれよ。同じ男子だろう」

シャル 「えっと、織斑君に、グラハム君だよね？ 初めまして。僕は」

一夏 「ああ、いいからいいから」

シャル 「え？」

グラ 「そうだな。まずは何より逃そ……移動が先決だ。女子が着替え始めるからな。……それに来る」

シャル 「え、何が？」

一夏 「いいから早く行こう。とりあえず男子は空いてるアリーナ更衣室で着替え。これから実習のたびにこの移動だから、早めに慣れてくれ」

グラ 「これはなかなか辛いぞ…………慣れるとこより、落ち着くまでだが」

シャル「う、うん……？」

シャル「…………」ソワソワ

グラ 「どうかしたか？ トイレなら少し距離があるのだが……」

シャル「トイ……つ違つよ！」

グラ 「そ、そうか」

グラ 「…………ところで一つ質問なのだが、『ガンダム』を知つてはいないか？ 『MS』は？」

シャル「え？ え？ と、アニメか何かかな？ ごめん、よく分からないや」

グラ 「さうか。いや、すまないな。忘れてくれ」

グラ（万が一と思つて聞いてみたが……悲しくも予想通り、か……）

一夏 「おい、2人とも話してないで、もつと急いでくれ。でないと」

「ああッ！ 転校生発見！」

「しかも、織斑君とグラハム君も一緒に！」

一夏 「……ちいッ！ 言わんこりちやない、グラハムー！」ダッ

グラ 「ああ！ 行くぞ、シャルル、捕まつてはことだ！」ダッ

シャル 「へ、へえー？」

グラ 「なにをじている、ほら」ガシッ、ダッ

シャル「！！」

「逃がすかよお、そ！」おー！」

「總員、第一種戦闘配置！　これは訓練ではない！　繰り返す」

一夏（だあーつ、毎回毎回、一体何なんだよ此処はー！）

「織斑君とグラハム君も良いけど、あの愛くるしさは脅威ね

「しかも、つぶらな瞳はエメラルド！」

「さやああつ！　見て見て、グラハム君と転校生！　手！  
手繋いでるー！」

「日本に生まれて良かつた！　ありがとうお母さん！　我が世の春が来ました！」

シャル「な、なに？　何でみんな騒いでるの？」

一夏 「そりゃ、男子が俺らしかいないからだろ、此処に

シャル「…………？」

一夏 「いや、普通に珍しいだろ。HSを操縦できる男って、今のところ俺達しかいないんだろ?」

シャル「あっ! ああ、うん。そうだね」

グラ（……？）

一夏 「それに、ここは女子校みたいなもんだし。男子と極端に接点が少ないので余計過熱してるんだろうぜ」

一夏 「……つと、はあ、はあ、後少しだな。此処を曲がれ

グラ「! ? 待て! そこは前も

ザツ!

「よくもまあ、ノコノコと……思れる心がないのかい!」

一 夏 「しまつた、ならひつけ……」

「怯えろ！ 竜め！ 此処で一網打尽となれ！」 ザツ！

グラ 「…………ふう、どうやら、やはり今回も困まれてしまつたみたいだな。あすれば……ふツー！」

シャル「ひ、ひやあ！？」

一 夏 「グラハムな」「一夏、後はよろしく頼むー！」

一 夏 「……へ？」

グラ 「とくと見るが良い、その程度で私の道を阻めはしないと！ 人呼んでグラハム・スペシャルー！」 ダダツ、ダン！ スタ

一 夏 「誰も呼んでねーよ！ 置いてくなーーー！」

「くう！ 最大の目標がーー！」

「こうなつたら織斑君だけでもー！」

「普段接点がない我々には……」

一夏 「は、ははは……」

シャル 「ポカーン……」

グラ 「フハハハハハハ！！」

微かな違和感

〈第2アリーナ更衣室〉

プシュウ！

グラ 「ふむ、一夏、君の犠牲は無駄ではなかつたぞ。無事到着だ  
な」

シャル「……あ、あの」

グラ 「ん？ どうした、シャルル？」

シャル「いや、その……そろそろ降ろしてくれないかな？」

グラ 「…ああ、すまない。苦にならないからすっかり忘れていた」  
スト

シャル「う、うん」

グラ 「なにせ、一夏とは違つて軽かつたからな、シャルルは。それに、なんだか柔らかかったし」

シャル「や、やわッ…！？」

グラ 「…おつと！ そんなことよりも予想以上に押してゐるな。すみやかに着替えないといと、これでは一夏が無駄死になりかねん」 シュル、バサツ

シャル「わあつ！？」

グラ 「？ どうした、先程から頓狂な声を上げて？」

シャル「え？ いい、いや、なんでもない。なんでもないよ！」

グラ 「ならいいが、……早く着替えた方がいいぞ。千冬女史は厳しいからな、遅れると面倒だ」

シャル「……う、うん。き、着替えるよ？ でも、その、あつち向いて……ね？」

グラ 「？」あ、ああ、もううんだ」クル

グラ 「…………」シユル

シャル「…………」

グラ 「……シャルル？」

シャル「は、はい！？」

グラ 「……氣のせいかもしけないが、その、物凄い視線を感じるん  
だが」

シャル「み、見てない！別に見てないよ！？」き、「氣のせいだよ  
！」

グラ 「…そ、そつか。そうだな」

グラ 「…」(のフレッシャーは何だ！？ 压倒された！？)

グラ 「…………」

シャル 「…………」

グラ（…なぜか、居た堪れない。ど、どつす 「ふいへ、なんとか着いた。もう駄目かと思つたぜ」 プジコ

一夏 「ん？ どつしたんだ、2人とも？ 固まつて。早く着替えないとまずいぜ」

グラ 「一夏、ありがとづ」

一夏 「どうしたんだよ、急ご。ああ、やつそのあれか？ まあ、気にすんな」

グラ 「いや、ありがとづ。やすが一夏だ」

一夏 「は？ どうした？ なんか氣色悪いぞ」

一夏 「と、そんな」とより早く着替えよつぜ、グラハム。シャルルはもう着替えてゐるのに「バサ、シユル

グラ 「なにー?」 クル

シャル「あははは…」

グラ 「エラスース（これ）を着るのになにかコシがあるのか?」

シャル「い、いや、別には……」

一夏 「でも、やつぱりこれ着づらこよな。裸になんなきやいけないし、水着みたいだし、引っかかるてさ」

シャル「ひ、引っかかるって?」

グラ 「確かにな、ピッタリしていくて動きやすいのは良いが、窮屈だな」

シャル「窮屈…………」

一夏 「…………よし、着れた。グラハムは?」

グラ 「ああ、もう大丈夫だ」

一夏 「よし、待たせたな。シャルル」

シャル 「…………」

一夏 「シャルル?」

シャル 「…は! え? なに?」

一夏 「いや、行こ!」

シャル 「う、うん」

グラ 「……ふむ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0068u/>

グラハム「抱きしめたいな、IS！」

2011年11月23日21時47分発行